

ロンサールにおける木蔦 *lierre*  
—クーマエの巫女と木蔦の愛のメッセージ—

延 味 能 都

岡山大学ヨーロッパ言語文化研究  
第 26 号 別刷  
2007 年 2 月



ロンサールにおける木蔦 *lierre*

## ー クーマエの巫女と木蔦の愛のメッセージ ー

延 味 能 都

## 序

先の論文では植物のミルト（桃金娘：myrte）に注目して考察を行っている<sup>1</sup>。月桂樹 *laurier* が主に武勲での栄光を象徴し、一方ではミルト *myrte* が愛神ヴィーナスとの関連から恋愛、恋人達、さらには恋愛詩や恋人達の楽園にいたるまでの幅広い意味で使用されていることを踏まえ、ロンサールに「ミルトの森（木陰）」という定型的な形で使用される言い回しをラテン語作品にさかのぼってまとめ、古典との関連を中心に考察したものである。その際にはロンサールの全作品から月桂樹やミルトの語を含む用例を収集したわけだが、集めた用例の中には月桂樹とミルトに加え、他の植物を含む用例も認められた。その一つに木蔦 *lierre* がある<sup>2</sup>。

月桂樹がアポロンと結びつき、ミルトが女神ヴィーナスと結びついていたように、木蔦は酒神バックスと結びついている植物である。バックスは葡萄、葡萄酒、結婚、詩的栄光、詩的靈感など、さまざまな象徴的意味をもつ神としてロンサールの作品には90例の出現例がある。バックスととりわけ強い結びつきをもつ植物として筆頭にあげられるのは葡萄 *vigne* であり、これは72例の出現例がある。これに対して、Creore の *A word-Index to the poetic works of Ronsard* は、木蔦 *lierre* に関してロンサールでの64例の出現箇所をあげている<sup>3</sup>。同書は月桂樹に関しては167例をあげており、数からいえば、木蔦は月桂樹の半分以上という状況にある。しかし、恋愛という重要なテーマと結びついているミルトが35例でしかないこと、さらにロンサールの盟友である Du Bellay の作品では木蔦が8例の利用に留まっていることを考えれば<sup>4</sup>、ロンサールにおいて64という使用例がある木蔦は、植物としては、や

1 拙論、「ロンサールにおける「ミルトの森（木陰）」＝*fortunata nemora*＝ou＝*lugentes campi*」、『岡山大学ヨーロッパ言語文化研究』25号、2006、および「ロンサールにおける *Myrte* と楽園－楽園描写と古典－」、岡山大学大学院文化科学研究科「文化共生学研究」4号、2006、を参照されたい。なお、本研究は科学研究費補助金を受けた「ロンサールの作品に現れる同一・類似表現の考察と注釈再考」、基盤研究（C）、課題番号17520170の研究結果の一部である。

2 ロンサールでは「*lierre*」という形もあり、様々な表記で現れる。

3 Creore, A.E., *A word-Index to the poetic works of Ronsard*, 2 vol., W.S. Maney and son LTD., Leeds England, 1972.

4 内訳は *hierre* 4例、*hyerre* 2例、*lyerre* 1例、*ierre* 1例。Cameron, Keith, *Concordance des Œuvres poétiques de Joachim Du Bellay*, Librairie Droz, Travaux d'Humanisme et Renaissance No.222, 1988.

はり頻繁に登場する植物と考えて良いだろう。

木蔦は葡萄と共に酒神バックスが現れた近辺の詩句に出現することも多い。この意味では、バックスの出現に引きずられたと考えることも可能で、バックスを多く取り上げたロンサールの作品に木蔦が出現することは、これもまた不思議なことではないようにも見える。さらにロンサールの作品にはさまざまな植物が出現しており、木蔦という植物が出現したこと自体はそれほど注目に値することではないだろう。しかしながら、木蔦の用例を調べてみると、多くは古典作品にもすでに現れている使い方ではあるが、中には興味深い使用例が含まれていることがわかる。

木蔦と酒神バックスとの関係、ロンサールにおける使用法についてはすでにある程度の研究が行われており、本稿で参照した Laumonier 版でも Pléiade 版でも典拠に関してはいくつもの注が与えられている<sup>5</sup>。しかしそれらの注には作品内の特定の語との関係のみに着目したものであったり、形式のみに着目したものなどがあり、古典作品との関係から見ると、それらが与える情報は意外なほど断片的であるように思える。また、用例を検討する過程では、ほぼ明らかに、典拠が同定できるにもかかわらず注が付されていないものなどが依然として存在している。こうした点に留意しながら、本稿では木蔦を中心に古典作品との関係を考察する予定である。

### 1. ソネ *Au Roy* 詩のジャンル（内容）を表す木蔦

Roy, qui les autres Roys surmontez de courage,  
 Ne vous excusez plus desormais sur la guerre,  
 Que vostre ayeul Francus ne vienne en vostre terre  
 Qui durant voz combats differoit son voyage.  
 Apres la guerre il faut qu'on remette en usage  
 Les Muses & Phebus, & que leur bande asserre<sup>6</sup>  
 Des chapeaux de Laurier, de Mirthe, & de l'ierre  
 Pour ceux qui vous feront present d'un bel ouvrage.  
 En guerre il faut parler d'armes & de harneys:

5 Pléiade 版の注は Laumonier 版の注と比較して明らかに新しい研究の成果を反映しているものも多い。しかしその基盤が Laumonier 版の注にあることは一目瞭然である。また、底本が 1584 年の全集となっているため、初版では木蔦が用いられていたが、後に変更などで木蔦が消えてしまった場合などは、それに関わる注は当然ながら付されていない。

6 asserre : composer. Huguette cite ce passage dans son *Dictionnaire de la langue française du seizième siècle*.

En temps de paix, d'esbats, de joustes, de tournois,  
De nopces, de festins, d'amour, & de la danse :  
Et de chercher quelqu'un pour celebrer voz faits,  
Car il vaudroit autant ne les avoir point faits,  
Si la posterité n'en avoit cognoissance.<sup>7</sup>

詩編内で最初の4行詩に現れる Francus とはロンサールが Henri II の勧めによって計画していた *La Franciade* を示唆するものとされている<sup>8</sup>。*La Franciade* は 1554 年の始めに王からの示唆があったが、その後はロンサールの度重なる要請にも関わらず実質的な援助が与えられなかった。この一節は王に対して *La Franciade* の計画について再びさりげなく思い出させるようとする意図もある。しかし一方では、今回の勝利は *La Franciade* の登場人物であり王家の祖先である Francus が滞在していたからではない、という展開によって、停戦協定における実質的な勝利は他の誰のものでもなく、王 Henri II の見事な勝利であると讃える意味を持つことになる。

このソネは Henri II 率いるフランスと Charles V 率いる神聖ローマ帝国皇帝との間で行われていた戦いに終止符を打った Vaucelles の停戦協定（1556 年 2 月 5 日）以降に書かれたものとされている<sup>9</sup>。詩編の内容は戦時と平時を対照させているところに一つのポイントがあり、この戦いがどのようなものであったかは、詩の背景として重要な意味を持っている。

フランスと神聖ローマ帝国の確執は 1554 年以来、熾烈を極めていた。Charles V は Henri II に対して、ナポリとミラノへの権利主張を取り下げること、サヴォワとピエモンテの権利を le duc Emmanuel Philibert de Savoie に回復すること、さらにはシエナから撤退し、メス、トゥール Toul、ヴェルダンの三カ所の司教区を放棄し、リュクサンブールの占領を解くことなどを求めている。こうした要求は Henri II にはとうてい承伏できる要求ではなかった。しかし、その最中であって、Charles V は、近いうちに息子であるスペイン王の Philippe II に帝国を委譲する考えがあったことなどから、休戦の道を探っていた。

1555 年には、フランスはイタリアで勝利しており、さらにナポリ出身の新教皇パウル IV 世が、スペインによるナポリ占領が原因で、極度にフランス寄りであったことなどから、こ

7 T7,p.300, *Nouvelle Continuation des Amours, Sonet Au Roy*. これ以降、テキストには *Œuvres Complètes de Ronsard*, éd. Laumonier, S.T.F.M., Librairie NIZET, 1937-1990 を使用する。巻を T7 などと省略して表記する。

8 T7, p.300, note 2 : « Allusion au projet de la *Franciade*, que Henri II avait encouragé au début de 1554, sans que ses promesses aient été suivies d'effet, malgré les appels réitérés de Ronsard [...] »

9 La trêve de Vaucelles (15 février 1556) およびこの戦争については © cliannaz@ free.fr, <http://chrisagde.free.fr/val/h2guerre.php3?page=5> 参照。

の時期の情勢はフランス側に有利な状況があった。しかしカレーの近くのマルク Marck で捕虜の交換と身代金の問題について行われた交渉は領土問題で暗礁に乗り上げ、成果無く終わった。1555 年 11 月の交渉では再び捕虜の問題が話し合われ、捕虜の身代金を集めるためには長期の停戦しかないことに両者は同意する。だが、フランス人捕虜の中でも高位の Bouillon 公爵にして元帥の Robert de La Marck の領地が帝国に帰属するのか、それとも 1552 年にその地を占領したフランスに帰属するのかを巡って再び論争となってしまった。François I 以来得たもの全ての返還に応じることは Henri II の敗北であり、そうした事態をさけるために Gaspard de Coligny によって、両者が占領地を維持したままでの停戦が提案された。フランス側は Charles V の帝国委譲の事情を知っているためこの要求にこだわり、ハブスブルグ家はこの提案をのむこととなった。結局、フランスは 1552 年以来占領していた地域をそのまま維持することができ、この休戦協定は Henri II にとっては輝かしい勝利となったのである。したがって、このソネで示される戦後とは、王家にとっても、全面的な勝利を勝ち得たに等しい高揚した状況をさしていることになる。

このように王の勝利を最初の 4 行で呈示して讃えた後、次の 4 行では、王の、フランス側の輝かしい勝利で停戦となり、戦の終わった後では文芸を復興せねばならぬという展開へと進む。「詩神ミューズ達やフェビウスアポロンを / 再び蘇らせねばならぬ」*« il faut qu'on remette en usage / Les Muses & Phebus »* という。つまり、もはや戦や武器ではなく再び文芸に目を向ける時が来たというのである。そして王を讃える優れた作品を書いた者には月桂冠、ミルトの冠、木蔦の冠を与えるようにせねばならないという。ここで本稿のテーマである木蔦 *lierre* が月桂樹、ミルトと共に等しい扱いで並置されて出てくる<sup>10</sup>。

次の 3 行では、書かれるべき詩の内容がならべられており、それぞれの冠がどの内容に対応するかが読みとれる。それらは *« esbats »* 浮かれ騒ぎ、*« joustes »* 騎馬槍試合、*« tournois »* 勝ち抜き槍試合、*« nopces »* 婚礼、*« festins »* 饗宴、*« amours »* 恋、*« danse »* 踊り、となっている。月桂冠は一般的な顕彰の意味として使用され得るが、狭い意味では武勲・戦勝での栄光を象徴する。月桂冠はここでは *« joustes »* 騎馬槍試合、*« tournois »* 勝ち抜き槍試合を内容とする詩を意味している。一方、ミルトはヴィーナスとの関連から恋愛を象徴するため、ここでは内容的には *« amours »* 恋愛に対応する<sup>11</sup>。木蔦はすでに述べたようにバックカスと結び

10 これらの 3 種の植物が複数行に渡って隣接して出現する例はわりとあるのだが、一行にかたまって現れる例はもちろん多いものではなく、ロンサールの全作品を見渡しても 2 例しか認められない非常に希なケースである。一つはここで取り上げているソネ *Au Roy* であり、もう一つはソネ LVIII である。いずれも Laumonier 版ロンサール全集第 7 巻で、*Au Roy* は『新続恋愛詩集』*Nouvelle Continuation des Amours* に収録されており、ソネ LVIII は『続恋愛詩集』*Continuation des Amours* に収録されている。ソネ LVIII は次章で扱う。

11 *« nopces »* 婚礼は後述するように木蔦と橡の木との関係からバックカスに属すると考えるのが妥当だろう。

つきの強い植物であり、そのバックスは取り巻きたちの狂乱の乱痴気騒ぎ (*bacchanale*) とは切り離すことは出来ない。すると、木蔦ーバックスー乱痴気騒ぎという結びつきから、木蔦は残りの、*« esbats »* 浮かれ騒ぎ、*« festins »* 饗宴、*« danse »* 踊りに対応することとなる。

つまり、このソネでは、木蔦 *lierre* という名詞は月桂樹やミルトと同じように、詩のジャンルを象徴する役割を与えられていることがわかる<sup>12</sup>。しかし、次章で扱うソネでは、木蔦は詩のジャンル示すものとはなっていない。

## 2. ソネ LVIII, XXXVII, LIX

『続恋愛詩集』のソネ LVIII 番は月桂樹、ミルト、木蔦が一行の詩句に同時に現れるもう一つの例である。

Il ne sera jamais, soit que je vive en terre,  
 Soit qu'aus enfers je sois, ou là-haut dans les cieus,  
 Il ne sera jamais que je n'aime trop mieus  
 Que myrthe ou que laurier la feuille de lierre.  
 Sus elle cette main qui tout le cœur me serre  
 Trassa premierement de ses doigts gracieus  
 Les lettres de l'amour que me portoient ses yeux,  
 Et son cœur qui me fait une si douce guerre.  
 Jamais si belle fueille à la rive Cumée  
 Ne fut par la Sibylle en lettres imprimée  
 Pour bailler par écrit aus hommes leur destin,  
 Comme ma Dame a paint d'une espingle poignante  
 Mon sort sus le lierre: é Dieu, qu'amour est fin!  
 Est-il rien qu'en aimant une Dame n'invente? <sup>13</sup>

12 最後の3行は詩に記録としての価値を与えたもので、同様な主張はすでに『フランス語の擁護と頌揚』に見られる。Joachim du Bellay, *La Defence et Illustration de la langue françoise*, éd. Chamard, Nizet, 1970, Liv.I, Chap.II, « [...] songeant beaucoup de foyes d'ou vient que les gtestes du peuple Romain sont tant celebrés de tout le monde, voyre de si long intervalle preferés à ceux de toutes les autres nations ensemble, je ne treuve point plus grande raison que ceste cy : c'est que les Romains ont eu si grande multitude d'ecrivains, que la plus part de leur gestes (pour ne dire pis) par l'espace de tant d'années, ardeur de batailles, vastité d'Italie, incursions d'estrangers, s'est conservée entiere jusques à nostre tens. »

13 T.7, p.175, sonnet LVIII.

先にあげたソネ *Au Roy* では木蓼は詩のジャンル（内容）を示していた。しかし、月桂樹、ミルト、木蓼といった植物が常に詩のジャンルや性格を象徴しているわけではないことはこの例から読み取ることができる。

まず、最初の4行詩で「地上で暮らしていようと、地獄にいようと / あの天の高みにいようと」というロンサールには良く出てくる言い回しで「どこにいようと / 生きていようと死んでいようと」という設定が行われている<sup>14</sup>。そして次に3種類の植物が1行の詩句におかれ、中でもとりわけ木蓼を好むと語られる。1560-1571年の版では myrte が没薬 myrrhe となっている。しかし、myrrhe の語は後に元のテキスト myrte にもどされている。没薬 myrrhe は東部アフリカやアラビアなどに産するカンラン科の植物から採集したゴム樹脂で芳香があるミルラと同義語である。エピソードとしては、オウィディウスの『転身物語』巻10には、王である実の父キニラスに恋をしてしまった娘のミュラがミルラに転身する話がある<sup>15</sup>。しかしここでの比較はアポロンの聖木である月桂樹よりも、ヴィーナスの聖木であるミルトよりも、という形をとって木蓼に最上の地位を与えることに主眼がある。したがって、ここにミルラを持ってくると、この詩編の要になっている比較そのものが成り立たないので、ここは誤植 (myrthe ≠ myrrhe) と考えて問題ないだろう<sup>16</sup>。

次の4行詩では、書き手が木蓼を好む理由が挙げられている。その理由とは恋人が木蓼の葉に愛の告白を書いたからである。次の3行ではクーマエの巫女の逸話を引き合いに出して、恋人がメッセージを書いた木蓼をその葉よりも美しいとして、クーマエの巫女が予言を書いた葉よりも優位におき、最後の3行へと至る<sup>17</sup>。

この詩編の内容は一言で要約すれば「彼女が愛の告白を木蓼の葉に書いたからミルトや月桂樹よりも木蓼の葉が好きだ」という話である。したがって、この木蓼は詩のジャンルや内容ではあり得ない。そしてこの展開にはもちろん後ろ盾となるエピソードがある。これはウェルギリウスにでてくるクーマエの巫女シビュラの話が元になっているとされている<sup>18</sup>。

ところで、「木蓼の葉に愛の告白を書く」という同様な展開をする詩編は、実は他にもソ

14 T7, p.173, note 2 : « Alternative fréquente chez Ronsard. »

15 Ovide, *Métamorphoses*, X, v.298-502.

16 この詩は、1578年以降の版では削除された。

17 ここでは恋人の女性が書いた言葉がはっきりと書かれているわけではない。また、*« amour est fin »* とそっくり同じ言葉がマロにあるが注は付されていない : *L'adolescence clémentine, Troisième Élégie en forme d'Épître, Quand j'entrepris l'écriture*, v.65 : *« Amour est fin, et sa parole tarde »*. Clément Marot, *L'adolescence clémentine*, imprimé en Anvers, par guillaume du mont L'an apres la nativité de Jesu Christ. M.D.XXXIX (1539), document électronique au format PDF.

18 T7, p.175, note 3 : « Au reste ce tercet contient une allusion à deux passages de Virgile, parlant de la Sibylle de Cumès, *En.* III, 441 et suiv. ; VI, 72 et suiv. ». Éd. Pléiade, t.I, p.287, note 2 et 3 : « 2. Le lierre, arbre toujours vert, est aussi arbre mortifère (voir Pline, *Histoire naturelle*, XVI. CII, CLII et CCXLIII). 3. Voir Virgile, *Enéide*, III, v.444-445. »



ネが2つある。同じ『続恋愛詩集』の中のソネ XXXVII と LIX である。まずソネ XXXVII では以下のようになっている。

J'aurai toujours en haine plus que mort  
 Le mois de Mai, le *lierre*, & le sort  
 Qu'elle écrivit sus une verte feuille :  
 J'auray tousjours cette lettre en horreur,  
 Dont pour adieu sa main tendre & vermeille  
 Me fait present pour me l'empreindre au cœur.<sup>19</sup>

この詩編では「私」が嫌悪するものが3つあげられている。一つは「5月」であり、もう一つは「木蔭」であり、そして「彼女が葉に書いた運命」である。この展開からすると、彼女が何らかの詩葉を書いた時期が5月であり、告白は木蔭の葉に書いて行われた。したがって木蔭が嫌悪される理由は恋人の女性がその葉の上に書いた言葉であり、しかも文脈からしてこれは別れの言葉であろう。他のソネと書かれた言葉の意味するものは異なるとしても、ここにもやはり木蔭に恋に関わるメッセージを書くという行為がある。Laumonier 版では同詩集のソネ LVIII と LIX に送りがついているが<sup>20</sup>、すでにソネ LVIII については見ているので、ソネ LIX をみると、以下のような展開になっている。

J'aurai toujours au cœur attachés les rameaux  
 Du *lierre*, où ma Dame oza premier écrire  
 (Douce ruze d'amour) l'amour qu'el' n'osoit dire,  
 L'amour d'elle & de moy, la cause de noz maus :  
 [...]  
 Non pour autre raison (ce croi-je) que la mienne,  
 Bacchus orna de toi sa perruque Indienne,  
 Que pour recompenser le bien que tu lui fis,  
 Quand sus les bords de Die Ariadne laissée  
 Luy fait sçavoir par toi ses amoureux ennuy,.  
 Ecrivant dessus toi s'amour & sa pensée.<sup>21</sup>

19 T7, p.154, v.9-14.

20 T7, p.155, note 1 : « [...] A rapprocher les sonnets LVIII et LIX ci-après. »

21 T7, p.174, sonnet LIX, v.1-4, v.9-14.

この詩編では、恋人の女性は、口に出して言う勇気のない言葉（愛の告白）を木葛に書いて告白したという。その後に続いて、話はバックスと木葛の関係へと展開される。バックスは木葛で体や杖を飾っている姿として描かれることが多いが、バックスは同じ理由（愛の告白が木葛に書かれたという理由）で頭を木葛で飾っているのだという。テーセウスに海岸に置き去りにされたアリアドネーが、木葛に書いてバックスに愛の告白をしたからだ、というのがこの詩編の展開である。

さて、ここまで合計4つのソネを見てきたが、最初のソネ *Au Roy* は『新統恋愛詩集』に収録されているソネで、そこでの木葛はバックスとの関わりによって詩のジャンル（内容）を象徴していた。他の3つはいずれも『統恋愛詩集』に収録されているのだが、同じ詩集内でありながら、ソネ XXXVII、さらにはソネ LVIII, LIX と二編続いて「愛の告白を木葛（の葉）に書く」という行為を取り上げており、読む側にしてみればこの行為が強い印象を残すことになる。しかし、ソネ XXXVII では後出のソネ LVIII と LIX に送りが付され、「愛の告白を木葛（の葉）に書く」という行為の典拠ともいべき部分は明らかにされていない。さらに、送られた先のソネ LVIII の展開はウェルギリウスの一節に送りが付され、一方のソネ LIX の話はカトゥルルス、オウィディウスの記述へと送りが付されている<sup>22</sup>。つまり、一つのソネでは他の二つのソネへの送りがあり、一方二つのソネの側では「木葛（の葉）に愛の告白を書く」という同じ行為でありながら、異なる典拠へと送りがついているのだ。

これらの3つのソネの展開で共通な要素は、1. 葉にメッセージを書くという行為がある。2. 葉が木葛（の葉）であること。3. メッセージは恋に関係したものである。以上の3点である<sup>23</sup>。そしてソネ LVIII はウェルギリウスに出てくるクーマエの巫女のお話を下敷きにしており、ソネ LIX はバックスとアリアドネーのお話をもとにしているということが指摘されている。しかし、実際にウェルギリウスの該当部分、カトゥルルス、オウィディウスの該当部分を参照すると、それほどすっきりとした話にはならないことが分かる。おそらく、これらの注は「木葛（の葉）に愛の告白を書く」という同じ行為に着目して付された注ではなく、ソネ LVIII ではクーマエの巫女との関連であり、ソネ LIX ではバックスとアリアドネーのエピソードとの関連で付された注なのである。

### 3. ウェルギリウス、カトゥルルス、オウィディウスの記述

まずソネ LVIII から送られているウェルギリウスの記述から検討してみよう。ウェルギリウ

22 T7, p.177, note 1 : « sur le mythe de Bacchus et d'Ariane, v. Catulle, *Epithal. de Pélée*, 120 à 268; Ovide, *Fastes*, III, 459 à 516; *Mét.*, VIII, 174 et suiv. » Pléiade 版では典拠に関連する注はついていない。

23 ソネ LIX では「葉に書いた」と明示されているわけではないが、枝や蔓に彫り込むというのはかなり無理があるように思われる。他の二つが「葉に書いた」と明示しているため、ここでもおそらく「葉に書いた」ことが前提になっていると思われる。

スの『アエネーイス』では、アエネーアースはトロイア人ヘレノスより歓待を受け、さらにヘレノスから前途について予言的な指示を得る。ヘレノスはアエネーアースにクーマエの巫女の助言を得に行くように勧めたのである。その際の描写によれば、クーマエの巫女は洞窟に住み、運命を歌い、木の葉に印と名前を書き留めるのだという。その該当部分はこうである。

huc ubi delatus Cumaeam accesseris urbem  
diuinosque lacus et Auerna sonantia siluis,  
insanam uatem aspicias, quae rupe sub ima  
fata canit foliisque notas et nomina mandat,  
quaecumque in foliis descripsit carmina uirgo  
digerit in numerum atque antro seclusa relinquit:  
illa manent immota locis neque ab ordine cedunt.  
uerum eadem, uerso tenuis cum cardine uentus  
impulit et teneras turbauit ianua frondes,  
numquam deinde cauo uolitantia prendere saxo  
nec reuocare situs aut iungere carmina curat:  
inconsulti abeunt sedemque odere Sibyllae.<sup>24</sup>

これを読むと分かるように、実は、ウェルギリウスのもとの話ではクーマエの巫女が与えるのは恋の予言や告白のように限られたものではなく、より広い意味での人間の運命である。さらには予言が与えられる媒体も単なる葉 *folium* なのであって、どの植物の葉かは明らかにはなっておらず、もちろん木蔭 *hedera* となっているわけではない。

24 仏訳でも特にこの点は考慮されていない。Virgile, *Énéide*, Les Belles Lettres, III, v.441-452 : - Dès que, porté là-bas, tu auras approché la ville de Cumae, les lacs divins, l'Averne bruissant de ses forêts, Tu verras une prophétesse en délire qui sous la roche profonde chante les destins et confie aux feuilles des signes et des noms. Tous les oracles que la vierge a inscrits sur ces feuilles, elle les dispose en un ordre et les laisse enfermées dans son antre. Ils restent en leur place tels quels et sans se déranger. Mais qu'au tourner des gonds le vent tenu de la porte ait ému, dispersé ces frondaisons légères, jamais ensuite elle n'a cure de rattraper au creux du rocher ses oracles voletants, d'en rétablir la suite ou les liens : on s'en va sans réponse et l'on maudit le séjour de la Sibylle. » もちろん邦訳でもこの点については触れられていない。ウェルギリウス、『アエネーイス』、泉井久之助 訳、岩波文庫、第3刷、1991 : 「神に憑かれし予言者の、女が深く洞窟に、／運命歌い木の葉々に、しるしと符牒を記するのを、／汝はみとめることを得む。木の葉に託せし歌の句の、／全てを処女は整理して、洞穴内にかくしおく。／この運命の書きつけは、常に不動にその位置に、／あって順序をくるわさず。されど扉が開かれて、／微風が吹きつけやわらかい、木の葉が門に乱るとき、／決して巫女は洞窟の、なかを飛び交う木の葉をば、／捕うることもその位置に、戻すことも歌の句の、／つづきを得るにも留意せず。故に人々うかがいの、／返事も得られず立ち帰り、このシビュラの居をにくむ。」(下線筆者)。

ウェルギリウスの『アエネーイス』ではもう一カ所で巫女の予言に触れる部分があるが、ここでは声に出して予言を述べるように頼んでいるのであって、木蔭の葉に書くのではない。

[...]. *Foliis* tantum ne carmina manda,  
ne turbata volent rapidis ludibria ventis :  
ipsa canas oro. [...] <sup>25</sup>

また、Laumonier 版も Pléiade 版でも触れていないが、オウィディウスの『転身物語』にもクーマエの巫女に関する記述がある。ここにはアエネーアースがクーマエの巫女に出会って父親の霊に会わせてくれるように頼み込む場面、つまり、先にあげたウェルギリウスと同様の場面がある。ここでは、

at illa diu vultum tellure moratum  
erexit tandemque deo furibunda recepto  
[...] dixit <sup>26</sup>

となっていて、巫女の予言は木の葉に書かれるのではなく、言葉で与えられている<sup>27</sup>。

つまり、典拠として指摘されたウェルギリウスの記述には、予言というメッセージを葉に書いて伝えるという行為はあるのだが、それは恋のメッセージではなく、媒体についても「葉」であって木蔭という具体的な植物名が上がっているわけではないのだ。

次にソネ IIX を考えてみよう。このソネでは英雄テーセウスとクレータ王ミーノースの娘アリアドネーのエピソードを利用しているとされる。神話としては以下のような話である。アリアドネーはテーセウスに恋をし、結婚をするという約束で迷宮を抜け出る手段である糸玉をテーセウスに与えた。テーセウスがミーノータウロス退治に成功したのはアリアドネーのこの手助けがあったからである。ミーノータウロスを退治した後、約束通りアリアドネーを伴ったテーセウスは共にナクソス（ディール）島に着くが、テーセウスはアリアドネーをその島に置き去りにする。ちょうどその時、嘆くアリアドネーのところへバッカスが現れ、二人は結婚するという話である。

25 Virgile, *Énéide*, Les Belles Lettres, VI, v.74-75 : « Seulement ne confie pas tes révélations à des feuilles, de peur qu'en désordre elles ne volent, jouets des vents ravisseur, préfère-le toi-même, je t'en prie. »

26 Ovide, *Métamorphoses*, XIV, v.106-113 : « la Sibylle tient longtemps ses regards fixés sur la terre ; enfin elle les relève et, agitée par le dieu qui a envahi son âme : [...] Ayant dit [...] ».

27 ここはウェルギリウスとの関連でクーマエの巫女に言及している部分であるので、この部分は注として取り上げられていても当然だと思うが Laumonier 版でも Pléiade 版でも注とはなっていない。

オウィディウスの『転身物語』の該当部分はわずか数行のものでしかない<sup>28</sup>。ここにはバックカスの属性としての木蔭も出ておらず、もちろん葉にメッセージを書いて伝えるという行為はなく、当然、恋の告白を書いて伝えるという行為もない。一方、同じオウィディウスの『祭暦』3月8日の章においては、テーセウス、アリアドネー、バックカスのエピソードがかなり長く扱われている。だが、話の中心は不実なテーセウスの後にバックカスと結婚した話、バックカスの浮気の話、アリアドネーの冠を星座にしてやった話、などであり、内容的には『転身物語』と大差はない。そこには「葉」を意味する *frons* や *folium* は出てくるが、木蔭は出てこない<sup>29</sup>。もちろん木蔭に恋の告白を書くという行為も出てこない<sup>30</sup>。

カトゥルルスにもテーセウスとアリアドネーを扱った同様な一節がある。ここでも、テーセウスに置き去りにされて嘆き悲しむアリアドネーとバックカスの話があり、バックカスがアリアドネーに恋をしているという話はあることにはあるが、そこには、たとえ木蔭を聖木とするバックカスであろうとも、木蔭に恋のメッセージを書くという行為はない<sup>31</sup>。バックカスを中心に据えたエピソードであるため、木蔭はエピソードの中に存在する。しかし木蔭は告白を書く行為や恋とはつながってはいないのである。

他には、植物と文字が関連するエピソードとしては、オウィディウスの『転身物語』第10巻に、あまりにも有名なヒュアキントスの話がある。206行には「お前はあたらしい花となって、その花びらの文字によってわたしの嘆きを真似るであろう」*« flosque novus scripto gemitus imitabere nostros. »* という1行がある。これは、アポロンが投げて跳ね返った円盤に当たってヒュアキントスが死ぬ際に、アポロンがヒュアキントスに言った言葉だが、ここ

28 Ovide, *Métamorphoses*, VIII, 172-177 : « utque ope virginea nullis iterata priorum / ianua difficilis filo est inventa relecto, / protinus Aegides rapta Minoide Diam / vela dedit comitemque suam crudelis in illo / litore destituit; desertae et multa querenti / amplexus et opem Liber tulit. » 「そして、乙女の助けによって繰りのべた糸のあとをたどり、これまでだれもみつけられなかったわかりにくい出口にかえりつぐやいなや、アエゲウスの息子は、すぐさまこのミノス王の娘をつれて逃げだし、ディア島にむかったが、無情にもその島の浜辺に乙女を置き去りにした。ひとり残された乙女は、大声をあげてなげき悲しんだが、やがてバックス神に愛されて助け出された。」 Liber : リベル神=バックカス。

29 Ovide, *Fastes*, III, v.481 : « Bacche levis leviorque tuis quae tempora cingunt Frondibus », « O léger Bacchus, plus léger que le feuillage qui cent tes tempes ».

30 ただ、ここには、ソネのなかのバックカスの髪毛の記述と符合する記述がある Ovide, *Fastes*, III, v.465 : « interea Liber depexos crinibus Indos vicit », « Cepnédant Liber qui avait vaincu les Indiens aux cheveux nattés [...] ».

31 Catulle, *Carmina*, LXIV, 251-253 : « At parte ex alia florens volitabat Iacchus cum thiaso Satyrorum et Nysigenis Silenis, te quaerens, Ariadna, tuoque incensus amore. », « Mais d'un autre côté Iacchus florissant accourait avec son thias de Satyres et avec les Silènes, enfants de Nysa; il te cherchait, Ariane, enflammé d'amour pour toi ».

も残念ながらロンサールの一節へはつながって行かない<sup>32</sup>。

さらに同じ『転身物語』の一節だが、アキレウスの武具を巡る争いのなかで、ウリクセースの雄弁に敗れたアイアースは自分の胸に剣を突き立てて果てる。その血が落ちた大地からは深紅の花が咲いた。そしてその花の花弁の真ん中には、アイアースを表す頭文字である AI のギリシア文字が現れていたという<sup>33</sup>。しかし、このエピソードもロンサールの木蔦の用例には関係していない<sup>34</sup>。

#### 4. folium

木蔦 *lierre* はどのようにしてロンサールの詩の中に組み込まれたのだろうか？ラテン語で蔦類は *hedera* であり、*folium* に木蔦の意味はない。ところが葉 *folium* は特定の植物の葉を指す場合がある。*folium* は「葉」ではあるが、*Le Grand Gaffiot, Dictionnaire Latin-Français* はその他に「feuille [ de palmier où la Sibylle de Cunes écrivait ses oracles ]: Virg. *En.* 3, 444」<sup>35</sup> という解説を載せている<sup>36</sup>。訳せば棕櫚の葉である。一方、*Collatinus, Dictionnaire latin-français*<sup>36</sup> では *folium* の項目でやはり「credite me uobis folium recitare Sibyllae, Juv. *Saturae*, 8, 126: lire un oracle de la Sibylle (les oracles de la Sibylle étaient écrits sur une feuille de palmier)」<sup>37</sup> という解説を与えている<sup>37</sup>。解説に出てくるユウェナーリスの引用例に関しても、

32 Ovide, *Métamorphoses*, X, v.206. 田中秀央、前田敬作訳の注によれば、「ai は「ああ（痛い、悲しい）」という意味のギリシア語の間投詞であるが、[...]」。なお、ギリシア人がヒュアキントスとよんだのは、トルコ原産のいわゆるヒヤシンス（ゆり科）ではなく、イリス（あやめ科）の一極であるイリス・ゲルマニカ（ドイツ語の *Schwertlilie*）であろうという説がある。この花にはギリシア文字の AI に似た斑点が見られるという」という優れた注が与えられている。オウィディウス、『転身物語』、田中秀央、前田敬作訳、人文書院、1979、p.351、注 56 を参照。

33 Ovide, *Métamorphoses*, XIII, v.206: « rubefactaque sanguine tellus / purpureum viridi genuit de caespite florem, / qui prius Oebalio fuerat de vulnere natus; / littera communis mediis pueroque viroque / inscripta est foliis, haec nominis, illa querellae. » 田中秀央、前田敬作訳では「花」となっているが原文では葉 *foliis* である。ここを花と訳したのは先のヒュアキントスでの注を踏まえたものであろう。

34 マリー・ド・フランスに恋人同士が植物を用いてメッセージを送るという点で似たような話がある。*Lais de Marie de France, Chevrefoil*, v.51-54: « Il [Tristan] coupe par le milieu une bague de noisetier / qu'il taille pour l'équarrir. / Sur le bâton ainsi préparé, / il grave son nom avec son couteau. »

35 *Le Grand Gaffiot, Dictionnaire Latin-Français*, Félix Gaffiot, Hachette, 2000. 実はこの解説にも不可解な部分がある。ウェルギリウスを典拠としてあげている以上、ここは Cunes ではなく Cumes ではないかと思う。ちなみに *Dictionnaire Latin-Français*, F. Gaffio, Hachette, 1986, éd. princep. 1935, の旧版では「feuille [de palmier où la Sibylle écrivait ses oracles]: Virg. *En.* 2, 444.」とのみ記載されている。

36 Gérard Jeanneau, Moteur de recherche programmé par Yves Ouvrard, <http://perso.orange.fr/prima.elementa/Dico.htm>

37 下線筆者。

邦訳、仏訳ともに特に触れておらず、「葉」として訳されている<sup>38</sup>。しかしこれは目下の問題の解決にはなっていない。クーマエの巫女が予言を書いた葉がどうして棕櫚の葉になるのか？という疑問が増えただけである。そこでさらに *Oxford Latin Dictionary*<sup>39</sup>にあたると、「The Sibyl wrote her oracles on leaves (acc. to Varro, on palm-leaves)」という記述があり、ここで初めて具体的な典拠としての作家名が出てくる。

Varro とは Marcus Terentius Varro のことでカエサルと同時代の学者である。ローマ帝国の内戦の時代にはポンペイウス側の士官であったが、後にカエサルと和解し、カエサルからローマにおける最初の公共図書館の設立を任されている。著書も多く、その範囲も多岐にわたっていた。この Varro がクーマエの巫女の葉＝棕櫚の葉という情報の出所である。では、今度はこの Varro の記述はどこに出てくるのかが問題になるのだが、それについてはセルウィウスに言及しなければならない。

西暦 400 年頃に、セルウィウス Maurus Servius Honoratus という文法学者でウェルギリウスの解説者がいた。セルウィウスは批評家であり、当時の一流の学者であった。セルウィウスはウェルギリウスの著作に関する膨大な注釈で知られているが、その注釈は主に 2 つの形式で現代に伝わっている。一つは比較的短い注釈であり、これは様々な論拠によりセルウィウスに由来することは間違いないとされている。もう一つは後に付け加えられたものである。付加された部分は疑いなく古いものだがセルウィウスの時代からはややずれている<sup>40</sup>。セルウィウスの注釈は現代では失われた著作を伝えている場合が多く、Varro の記述もその中に入っている<sup>41</sup>。

セルウィウスでは、先に挙げたウェルギリウスのクーマエの巫女に関わる部分の注釈に Varro の名前がある。

fata canit folisque notas et nomina mandat tribus modis futura praedicat: aut voce, aut scripto, aut signis, id est quibusdam notis, ut in obelisco Romae videmus: vel, ut alii dicunt, notis litterarum, ut per unam litteram significet aliquid. in foliis autem palmarum

38 Juvénal, *Satires*, Les Belles Lettres, 2005, VIII, 126: « Ne croyez pas que je débite des sentences de rhéteur, c'est la vérité, c'est un feuillet de la Sibylle que je vous lis. » ユウェナーリス、藤井昇訳、『サトゥラエ風刺詩』、日中出版、1995:「いま私が提案したことは格言ではない。真実なのだ。私がおまえ達に（巫女）シビュラの紙葉を朗読して聞かせているのだと考えるがいい。」

39 Founded on Andrews' edition of Freund's Latin Dictionary, Charlton T. Lewis and Charles Short, Oxford, Clarendon press, 1969.

40 その著者は当初は Aelius Donatus とされていたが、現在では Tiberius Claudius Donatus であろうとされている。どちらも 4 世紀後半の学者。この他にイタリアでもっと後になって加えられた部分もある。

41 以上、セルウィウスに関しては <http://en.wikipedia.org/wiki/Servius>

sibyllam scribere solere testatur Varro.<sup>42</sup>

つまり、いくつかのラテン語辞書で与えられた *folium = palma* の解釈はセルウィウスのウェルギリウス注解における Varro の引用がもとになっていたわけである。

そこで、Varro の存在をロンサルが知っていたかどうかという問題が出てくる。Varro の名前は Creore のインデックスでは記載がないが、Laumonier 版 18 巻 p.510 に一回だけ出てくる。これは Pierre de Paschal にあてたラテン語の文の中に出てくるもので、この文章が書かれたのは 1559 年とされている<sup>43</sup>。

Legendus est Varro, Plinius, Titus Livius, Salustius, Cato, Pandectae Juris, Terentius, Plautus, Virgilius, Horatius aliique id genus omnes latini sermonis principes.

ここまで問題にしているソネは 1555 年の出版だが、読むべき作家として、とりわけ Varro を筆頭に持ってきていること、そしてもちろんウェルギリウスもリストに含まれていることから、先のセルウィウスの注解が 16 世紀には出版されていたこともあわせて考えれば、ロンサルは当然 Varro の注釈に関して知識はあっただろうと推測できる。しかし、ロンサルは棕櫚の葉を用いたわけではなく、依然として問題の本質とはつながらないのだ。

##### 5. 巫女（シビュラ Sibylla）について

ロンサールのソネ LVIII ではクーマエの巫女の名が上がっており、この部分に関する注もそろってウェルギリウスの「アエネーイス」におけるクーマエの巫女の記述部分をあげている。しかしいわゆる Sibylla と呼ばれたのは一人ではなく、クーマエの Sibylla さえも唯一人

42 Maurus Servius Honoratus, *In Vergilii carmina comentarii. Servii Grammatici qui feruntur in Vergilii carmina commentarii ; recensuerunt Georgius Thilo et Hermannus Hagen*, Georgius Thilo, Leipzig, B. G. Teubner, 1881. ただし、以下の二つのルネッサンス期の出版本では -foliisque notas et nomina mandat - の部分はない。この部分はウェルギリウスの原文の引用部分であり、無くとも意味は変わらない。Virgile, P. *Virgilii Maronis Aeneidos libri duodecim* [Ressource électronique] / [cum commentario Servii Mauri Honorati Grammatici et Jodoci Badii Ascensii], CHI-CHIII, 1995, Bibliothèque Nationale de France, Reprod. numérique de l'éd. de Parisius : Thielmannus Kerver, 1500 ; Maurus Servius Honoratus et al., *Publii Virgilii Maronis, opera* [Ressource électronique] / cum commentariis Servi Mauri Honorati Grammatici, Aelii Donati, Christophori Landini... [et al], CLXVI, 1995, Bibliothèque Nationale de France, Reprod. numérique de l'éd. de Venetiis : a Philippo Pincio Mantuano, 1499. 「\* fata canit foliisque notas et nomina mandat - 声、文字、印の 3 つのやり方で未来を予言する。それはローマのオペリスに記されたものとよく似ている。さらに、ある人たちがいうには、文字で記されたものについては、一文字がなにがしかの事柄を示すという。またヴァッコによれば巫女は棕櫚の葉に書くのが習慣だという。」（筆者訳）

43 T18, p.510, *Petri Paschalii elogium*, note 1 : \* [...] cete investive, qui date de 1559 [...] \*.



の人間を指し示す呼称ではないことは古典古代の時代にすでに知られていた。ロンサールの作品の中には Varro の名前も出てきており、こうした Sibylla に関する知識・情報はロンサールも十分に得ていたと考えられる。だとすれば、いわゆる Sibylla について、「木苧の葉にメッセージを書く」というような話があるのだろうか。ここでは巫女に関してのまとめを行い、さらにロンサールにおける巫女 Sibylle について検討する。

Sibylla (仏 Sibylle) という名詞は現在では神に仕える巫女として普通名詞化しているが、本来は固有名詞であった。Sibylla の詳細については幾種類もの辞典・専門書等であきらかになっており、その概略は以下のようなものである<sup>44</sup>。

まず、古代では Sibylla はアポロンもしくは他の神の神託を告げる巫女であった。そして、紀元前 4 世紀にはすでに複数の存在として考えられていた。Norma Lorre Goodrich によれば、リウィウスは、それらのリストをあげようとはしなかったが、Sibylla の語が名前ではなく戦名であることを知っていたに違いないという。

最初のシビュレーはトロイアのダルダロスとネーソーの娘シビュレーで、預言の術に優れていたため、この名前が普通名詞になったという説がある。他に、ゼウスとアミアー（ポセイドーンの娘）の娘であるリビアのシビュレーという説もある。次はマルペッソスのヘーロゼレーで、ニンフと人間の娘で、トロイア戦争を予言した。ヘーロゼレーは生涯の大部分をサモスで過ごしたが、クラロス、デーロス、デルポイにも行った。彼女は石を持って歩き、その上に乗って予言をしたという。

一方、紀元前 1 世紀のローマの学者 Varro は巫女の出身地ではなく、予言を与えた場所による分類として、ペルシア、リビア、デルポイ、キメリア（イタリア）、エリュトライ、サモス島、キューメー（クーマエ）、ブリュギア（トロイア）、ティーブルと 9 つの土地の名をあげ、10 人の巫女がいたとしている<sup>45</sup>。

巫女たちのリストは L. C. F. Lactantius (B.C. 260-340 頃) によっても与えられる。1. ペルシアの巫女（あるいはアレクサンダー大王に予言を与えたとされる Chaldean）、2. リビアの巫女（蛇、メデューサを意味する Lamia という名前であった）、3. デルポイの巫女、4. イタリアのキメリア（Averno 湖のほとりに位置しており、つまりはクーマエまたはキューメー

44 「ギリシア・ローマ神話辞典」、高津春繁著、岩波書店、1978；*Grand Dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle*, Larousse, 1866；Priestesses, Norma Lorre Goodrich, HarperPerennial, 1990。

45 Priestesses, Norma Lorre Goodrich, HarperPerennial, 1990, p.293：「Although Livy must have known that "Sibyl", the Latin *Sibylla*, was a title and not a name, he made no effort to list these priestesses. The Roman historian Varro did list ten Sibyls, not by origin but by place of prophecy：Persian, Libyan, Delphic, Cimmerian (Italian), Erythraean (Ionian?), Samian (Isle of Samos), Cumaeon, Phrygian (Trojan), and Tiburtine (Latin).」・Servius にはまとまった記述は見つからない。後述の Lactantius に Varro の名前があがっている。

と同じ)、5. エリュトライの巫女(トロイア戦争を予言した)、6. サモス島の巫女、7. キューメーの巫女(名前は Deiphobe, Amalthea, Herophile, Demophile, Taraxandra)、8. ヘレスポントスの巫女(トロイアでソロン、キュロス大王の時代の生まれとされる)、9. プリュギア(アンキューラで預言を与えた)、10. ティーブルの巫女(ローマのカピトリウムの丘に像があった。像はティーブルの Anio 河で発見されている。)の10人をあげている<sup>46</sup>。

幾人ものシビュレーの中で特に有名なのはエリュトライのシビュレーであり、彼女はニンフと人間テオドーロスの娘で、コーリュコス山中の洞穴に生まれるやいなや成長して予言を始めた。両親は彼女をアポロンに捧げた。その名声の故に、他の土地のシビュレー達の中にはエリュトライのシビュレーの名を名乗ったり、自分の母国がエリュトライであるとした者達もいる。このように自分の出身をエリュトライであるとした巫女の中に、ロンサールにも出てきた、有名な、クーマエの巫女がいる<sup>47</sup>。

クーマエの名を有名にしたこの巫女は Lactantius の巫女リストの中で7人目の巫女である<sup>48</sup>。クーマエのシビュレーは他の大部分の巫女とは異なり、巫女としてアポロンに結びつけられ、一つの神殿に結びついており、その意味ではデルポイの巫女に立場的には近い。オウィディウスによればアポロンは彼女に「Virgo Cumae」と呼びかけている<sup>49</sup>。その名前は Amalthea とされるが Dermophile と呼ばれていたともされる。ウェルギリウスでは Deiphobe となっており、これはグラウクス Glaucus の娘であり、アポロンの巫女とされて

46 *Priestesses*, Norma Lorre Goodrich, HarperPerennial, 1990, p.293-294 : - The first Christian to list the Sibyls was L.C.F. Lactantius (c.260-340), [...] In his book on holy, religious institutions (Book I, Chapter 6) he lists the Sibyls as follows : 1. Persian (or Chaldean, who answered Alexander the Great), 2. Libyan (her name was Lamia, meaning Snake or Medusa), 3. Delphic Oracle (Delphi, Mt. Parnassus, Greece), 4. Cimmerian (located near Lake Avernus, i.e., Cumae), 5. Erythraean (from Babylon, and she predicted the Trojan War), 6. Amian (Isle of samos near Hera's temple complex), 7. Cumaeon (so named from Cumae in Campania, Italy); Sibyls named: Deiphobe, Amalthea, Herophile, Demophile, Taraxandra, 8. Hellspon-tian (Trojan, born at Troy during the lifetimes of Solon and Cyrus the Great), 9. Phrygian (priestess of Cybele who prophesied at Ancyra[Ankara, Turkey]), 10. Albanean or Tiburtine sibyl (Latin town of Tiburs, Latium), whose statue was on the Capitoline Hill in Rome. It was found in the Anio River at Tiburs. - Lactantius の著作については *Lactantii Firmiani preclarum opus*, I, 6, éd. B.N.F, 1995, reprod. de l'éd. de Roma, per Uldaricum Gallum Alamanum et Symonem Nicolai de Luca, 1474. 原著では Goodrich のまとめよりも記述が若干細かい。

47 「ギリシア・ローマ神話辞典」、高津春繁著、岩波書店、1978、ではこのエリュトライの巫女はイタリアのキューメー(クーマエ)の巫女と同一視されていたとし、オウィディウスの『転身物語』に出てくる逸話を続けて紹介している。

48 クーマエ(イタリア本土のキューメー Cumae)は紀元前8世紀頃の古代ギリシアの植民都市であり、ナポリの北西に位置するアヴェルノ湖 Lago d'Averno の近辺に位置する。*Grand Dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle* によれば、クーマエに上陸したアエネーイスが神託を聞きにゆくのは、このアヴェルノ湖の南の岸にある洞窟である。

49 Ovide, *Métamorphoses*, XIV, 135.

いる<sup>50</sup>。オウィディウスの記述では、アエネーイスの時代にはすでに700歳に達しており、さらにあと300年は生きるという<sup>51</sup>。彼女は7世紀に渡って生きているため、ウェルギリウスは *Longaeva*<sup>52</sup>、オウィディウスは *Vivax* と呼んでいる<sup>53</sup>。

以上がシビュレーまたはシビュラに関する概略である。したがって巫女といっても多様であり、預言を与える方法も一つに定まっているわけではない。巫女の預言は一般に一種の狂乱のうちに与えられたが<sup>54</sup>、預言を与えるやり方はさまざまである。ウェルギリウス『アエネーイス』VI, v.76以降ではクーマエの巫女の預言は葉に書かれるのではなく、狂乱状態になった巫女の言葉で語られる<sup>55</sup>。他には『アエネーイス』III巻にあるように、文字、符号、印などで与えられたが、それらの媒体は単なる葉であったり、棕櫚の葉であったりする。*Grand Dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle* では見出し語 *sibylle* の下に « feuilles de la sibylle » として項目が設けられており、それによれば « feuilles de chêne sur lesquelles la sybille écrivait ses oracles, et qu'elle libérait ensuite aux vents » であり、樅の木 *chêne* の葉に預言を書いたことになっている<sup>56</sup>。したがって、預言を木鷲の葉で与える巫女がいる可能性もあると思われるのだが、実際にはそうした記述はみつからない。

では、ロンサールにおけるクーマエの巫女の使用例はどうなっているのだろうか。実は、ロンサールには *Cumée*<sup>57</sup> の語は3例しか出ていない。一つはすでに検討済みのソネ LVIII のものである。他には « [...] quand mon chef seroit / De vieillesse aussi blanc que la vieille Cumée, » となっている例で、オウィディウスの記述にあるようにクーマエの巫女が700歳にも達する老女であることに着目した比較であり、ここでは我々が探している事柄とは無関係な比喩となっている<sup>58</sup>。

50 *Grand Dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle*, Larousse, 1866. では - Virgile la nomme Déiphobé, fille de Glaucus, et la qualifie de prêtresse d'Apollon. - としているが、これは Virgile, *Énéide*, VI, 36 で一回だけで、後は *Sibylla* である : - atque una Phoebi Triviaeque sacerdos, / Deiphobe Glauci, fatur quae talia regi -.

51 Ovide, *Métamorphoses*, XIV, 144-146 : - nam iam mihi saecula septem / acta, tamen superest, numeros ut pulveris aequem, / ter centum messes, ter centum musta videre. -

52 Virgile, *Énéide*, VI, 628 : - Haec ubi dicta dedit Phoebi longaeua sacerdos -.

53 Ovide, *Métamorphoses*, XIV, 105-106 : - [deseruit] itora Cumarum vivacisque antra Sibyllae / intrat - . Cf. *Fastes*, IV, 875 : - carmine vivacis Venus est translata Sibyllae - .

54 クーマエの巫女の予言集とローマの王タルクイニウスとの話はここでは触れない。

55 それは泉井久之助氏の VI, 76. に付された注にあるように、III, 441-457. にあるヘレノスの注意に従ったからである。

56 これはおそらくギリシア最古のゼウスの神託所であったドードーナ *Dodona* の話が入っていると思われる。神意は樅の神木の葉の風にそよぐ音、鳩の鳴き声、水の流れる音などで解釈された。セルウィウスの注解では『アエネーイス』, III, v.256, 466 ; v.110 ; 『農耕詩』, I, v.8, v.149, v.159 ; II, v.16 に関してドードーナに関する記述がある。

57 T6,p.51, note 2 : - Cumée est un adjectif calqué sur le latin Cumaea -.

58 T6,p.51, *Bocage* 1554, sonnet VII, v.12.

もう一つは「C'est d'une Hecube oser faire une Heleine, / D'une Cumée une autre Polyxene, / C'est se promettre avecques son amye / L'éternité d'une durable vie.」という一節で、『薔薇物語』の Raison の語りを模倣して恋の神とその性格について語る詩編の一部である。ここでは（恋とは）Hecube のように年老いて疲れ切った女性を Heleine のように若く輝いている女性にし、年老いて乱暴なクーマエの巫女を Polyxene のような優しく若い女性に変えること、限られた生の永遠を恋人に約束すること、と述べる一節である<sup>59</sup>。やはりここも我々が探している木葛と巫女に関する情報は与えてくれない。

さらに、巫女 sibylle の語の出現もロンサールの作品ではわずか 11 カ所に留まっている<sup>60</sup>。Ode A Michel de l'Hospital に出てくる例は予言者としてとらえられた巫女（複数）であり、詩編の最初の方で出てくる Mémoire の娘達である詩（神）の恩恵を受ける者としての位置づけである<sup>61</sup>。この後の一節には予言を与える巫女の描写が続いており、この部分はウェルギリウスのクーマエの巫女に関する記述がもとにあるとされ、狂乱の状態で予言を与える様子が描かれている<sup>62</sup>。だが、やはり木葛との関連はここには無い。Hymne de la Justice で与えられる 2 つの例も、やはり予言者としての巫女の位置づけはあるが、ここはクーマエの巫女でもなく、もちろん木葛との関連も無い<sup>63</sup>。Hymne de l'Automne が与える例も、Le chat での例でも、扱われているのは一般的な意味での巫女であり、もちろんクーマエや木葛とは関係がない<sup>64</sup>。Hercule Chrestien が与える 2 つの例は、キリスト到来の先触れをする予言者とし

59 T10, p.118, *Chanson*, v.29-32.

60 Creore の index では sibylle とその異綴りである sybille が別項目となっていて注意が必要である。11 例の内訳は sibylle が 5 例、sybille が 6 例である。この中の 1 例はすでに引用した『続恋愛詩集』のソネ I.VIII の例である。

61 T3, p.148, *Ode A Michel de l'Hospital*, v.529 : « Le cœur prophète des Sybilles ». Pléiade 版のロンサール全集ではこの部分に注が与えられている。Éd. Pléiade, I,p.642, note 6 : « En faisant des sibylles les premières bénéficiaires du don des Muses ».

62 T3, p.148, *Ode A Michel de l'Hospital*, v.531-534. « Si bien que leur langue comblée / D'un son horriblement obscur, / Chantoit aux hommes le futur, / D'une bouche toute troublée. » Ed. Pléiade, I,p.642, note 7 : « Souvenir probable de Virgile, *Énéide*, VI, v.98-100. » Virgile, *Eneide*, VI, v.98-100 : « Talibus ex adyto dictis Cumaea Sibylla / horrendas canit ambages antroque remugit ».

63 T8, p.65, *Hymne de la Justice*, v.368-369 : « les cœurs des Sybilles devines, / Des Prophetes ». Pléiade 版でも特に注釈はないが、I.II, p.481, v.348-349. と Laumonier 版と対応する詩句の位置が変わっているため注意が必要である。T8, p.65, *Hymne de la Justice*, v.367-369 : « Il faut pour la [gent] sauver que, de grace, illumines / De ton esprit les cœurs des Sybilles devines, / Des Prophetes aussi, qui seront tes prescheurs- ». [ ] 内筆者。

64 T12, p.49, *Hymne de l'Automne*, v.65-68 : « Mais courage, Ronsard, les plus doctes poètes, / Les Sybilles, Devins, Augures & Prophetes, / Huiez, sitlez, moquez des peuples ont esté : / Et toutesfois, Ronsard, ils disoient vérité ». T15, p.41, *Le chat*, v.47-48 : « Et comme on voit naistre ici des Sybilles / Par les troupeaux des femmes inutiles : ».

での巫女であり、やはり木蔦との関連は無い<sup>65</sup>。A *Monsieur de Belot* では、ロンサールがクーマエの巫女を念頭に置いているとしてウェルギリウスへ送りが付されているが、ここでは詩人である「私」が詩を書くための神懸かり状態を示しており、木蔦とは関連はない<sup>66</sup>。

1552 年の『恋愛詩集』収録の *Chanson* が与える例はやや趣が異なる<sup>67</sup>。ここでは当時の恋人カッサンドラがデルポイの巫女カッサンドラと同名であることを利用した比喩になっている。ここで « ma Sibylle » とされているのはトロイアの巫女であるカッサンドラだが、この詩編の後半では恋人のカッサンドラへとつながって行く。しかしここにも木蔦との関係はない。

1559 年の *Second livre des Meslanges*, ソネ IX もクーマエの巫女に関わるエピソードを背景に持っている<sup>68</sup>。クーマエの巫女は予言集をローマ王タルクウニウスに提供するにあたって高額を要求した。王が拒んだところ、9 巻ある予言集のうち 3 巻を燃やした上で、残りを同額で提供しようと言う。王が再び拒むとさらに 3 巻を燃やし、ついに王は最後の 3 巻をもとの言い値で買い取ったという<sup>69</sup>。しかしここもやはり木蔦とは関連はない。

したがって、クーマエ Cumée や巫女 Sibylle がでてくる場面で木蔦と恋の告白が絡むのは、問題にしている『続恋愛詩集』ソネ LVIII しか無く、そこで送りが付されたウェルギリウスではクーマエの巫女が取り上げられているにしても、やはり木蔦と愛の告白の話は出てこない。クーマエの巫女、あるいは巫女に関わる話から得られるのは、木の葉とメッセージを書く行為の関係でしかない。

## 6. Catullus, Horatius, Ovidius, 古典作品における木蔦

ロンサールはたびたびカトゥルルス、ホラティウス、オウィディウスの 3 人の作家を参照している。ここではこの 3 人の古典作家における木蔦 heder a が関わる記述を調べてみよう。

65 T8, p.211, *Hercule Chrestien*, v.71-74 : « Tu envoyas les Sybilles devines / Pour tes heraux, qui, de leurs voix divines / Prophetisant, preschoient en chacun lieu / L'advenement de toy, le Filz de DIEU ». T8, p.212, *Hercule Chrestien*, v.85-89 : « Mais, ô SEIGNEUR, les Gentilz vicieux / Qui n'avoient point ta foy devant les yeux / Ont converty les parcellles predites / (Que pour toy seul la Sybille avoit dittes) / A leurs faux Dieux, contre toute raison ». キリスト到来と巫女の預言については Laumonier 版と Pléiade 版に興味深い注が付いている。T8, p.211.note 6 ; éd. Pléiade, II, 527, note 3 を参照。

66 T15, p.19, *A Monsieur de Belot*, v.67-68 : « J'attends venir (certes je n'en ments point) / Cette fureur qui la Sybille espoit » ; note 2 « Ronsard pense ici à la Sibylle de Cumès, dont Virgile nous a dépeint l'état d'enthousiasme, *En.*, VI, 77 sqq. »

67 T5, p.135, *Les Amours* de 1553, *Chanson*, v.7-12 : « Mais ces pauvres obstinés, Destinés Pour ne croire à ma Sibylle, Virent, bien que tard, apres, Les feus Grecs Forcenés parmi leur ville ».

68 T10, *Second livre des Meslanges*, sonnet IX, v.11-12 : « Je ferai comme fist la colere Sybille / Au Roy qui ne voulut acheter ses escrits. »

69 この話は Servius, VI, 72 にある。

葡萄や木蔦がバッカスの属性であることはよく知られているが、木蔦がバッカス神と結びついている理由については具体的には、オウィディウスの『祭暦』に詳しく述べられている。オウィディウスは『祭暦』の中で「マルス月」(3月)の17日のバッカスの祭日について語っている。その中で、「(老女が)蔦の冠をするのはなぜでしょうか。バッカス神が蔦をもっとも好むからです」*« cur hedera cincta est? hedera est gratissima Baccho »*というくだりがあり、木蔦とバッカスの関係を示す例となっている<sup>70</sup>。さらに「また、そのようにもっとも好む理由を語るのも手間はかかりません。継母なる女神が幼子を探しているときに、ニュサのニンフたちが蔦の枝を揺籃の上にかぶせた、と言われるからです。」と続き、木蔦が幼いバッカスの守護の役割を果たしたことを理由としてあげている<sup>71</sup>。さらにユニウス月(6月)11日のマトラリア祭の記述の中にも「葡萄の房が実る髪に蔦の冠を巻いたバッカス神よ」*« Bacche racemiferos hedera redimite capillos »*という呼びかけがあり、木蔦とバッカスの結びつきが示されている<sup>72</sup>。

ホラティウス『歌章』*Carmina*の第1巻詩編1はパトロンのマエケーナースへの献辞となっているが、その中でホラティウス自身に触れている一節がある。そこは「このわたしはと申せば、詩才ある額を飾る常春藤によって天つ神々と交わる身」*« Me doctarum hederæ paremia frontium / dis miscent superis, [...] »*となっており、もちろんバッカスと詩との関係を背景として、木蔦が詩的靈感・栄誉と結びつく一節がある<sup>73</sup>。また『書簡詩集』*Epistæ*第1巻、第3詩編は友人のJulius Florusへあてた詩編である。Julius Florusはアウグストゥスが東方へ送ったティベリウスについて転戦していた。詩編は彼がどこにいるのかという問いから始まり、友人の話を経て、Julius Florus自身に話がおよぶ。この友人も多才であり、雄弁家、法律家、詩人という顔を持っていたからである。この詩編の中でホラティウスは友人に、弁護をしても、法律の問題に返答するにしても有能であるとし、さらに、この友人が

70 Ovide, *Les Fastes*, III, v.767 : « Pourquoi porte-t-elle (une pauvre vieille) une couronne de lierre? Le lierre est très cher à Bacchus » 「リベラリア祭では、老女たちがリベル神の巫女として、頭に蔦の冠を巻いた姿で街頭に座り、パンケーキをひとつひとつに示した。」、『祭暦』、第3巻、注146。

71 Ovide, *Les Fastes*, III, v.767-770 : « hoc quoque cur ita sit, discere nulla mora est. / Nysiadas nymphas puerum quaerente noverca / hanc frondem cunis opposuisse ferunt. » , « pourquoi il en est ainsi, tu ne vas pas tarder à l'apprendre. Alors que sa marâtre était à la recherche de l'enfant, les nymphes de Nysa ont tendu, dit-on, ce feuillage devant son berceau. » ゼウスはバッカスをヘーラーから隠すためにニュサのニンフたちに育てさせた。

72 Ovide, *Les Fastes*, VI, v.483 : « O Bacchus dont la chevelure est ceinte de pampres et de lierre ».

73 Horace, *Carmina*, I,1,v.29-30 : « Moi, le lierre, parure des doctes fronts, me mêle aux dieux du ciel; » ; note 8 : « Le lierre était consacré à Bacchus, que les poètes invoquaient aussi bien qu'Apollon comme leur inspirateur (cf. Prop. IV, 1, 62 : *mi folia ex hedera porridge, Bache, tua*). » 木蔦はバッカスへと結びつくが、バッカスも詩人達にとってはアポロンと同様に詩の発想を与える神であった。訳文では常春藤に「きづた」とルビが振ってある。訳は『歌章』、藤井昇、現代思潮社、1973による。

素敵な詩を書いたらならば、勝利者として木葛を得るだろうとしている<sup>74</sup>。この一節も『歌章』の一節と同様に、木葛と詩的靈感・栄誉との結びつきを示すものとなっている。

一方で、オウィディウスの『祭暦』によれば、木葛はバッカスだけに結びつくものではない。マイユス月（5月）の名前マイユスの由来について述べたくだりで、ホラティウスはその由来については諸説があることを述べ、その説明を詩神ムーサたちに求める。ポリュヒュムニア、クリオ、タリア、ウラニエと話が進んだ後でカリオペ（叙事詩を担当するとされる詩神）が話を切り出す。そのカリオペの描写に「このとき、手を加えぬ髪に葛を結んだカリオペが自分の率いる歌舞団の先頭に立って切り出しました」*« tunc sic, neglectos hedera redimita capillos, / prima sui coepit Calliopea chori: »*とある。この時、葛はホラティウスにおけるバッカスの記述と同様に、詩的靈感を象徴するものとなっている<sup>75</sup>。さらに同じオウィディウスの『恋の歌』第3巻、第9歌ではティブルスの死を歌っているが、その中に、ティブルスを死後の楽園であるエリュシウムの谷間にいるだろうとし、カトゥルルスに呼びかける部分がある。そこでは、「彼に会いに、青春の顔にきつたを巻いて来給え、博学なカトゥルルスよ」とあり、詩人の栄光としての木葛の冠を示す一節がある<sup>76</sup>。『転身物語』5巻では詩神たちとビーエリデスの歌合戦の話が語られる。ペラの王ビーエロスとエウヒッペの9人の娘たちは、歌がうまかったので詩神たちに挑戦し、敗れて鳥（カササギ）にされてしまう話である。詩神たちは戦いをカリオペひとりにまかせるのだが、その場面に「かの女（カリオペ）は、やおら立ち上がると、みだれた髪を葛でむすび」*« surgit et inmissos hedera collecta capillos »*とあり、ここでも詩神カリオペと木葛の関係が示され、詩的灵感の象徴としての役割が示されている<sup>77</sup>。

木葛に関わるのはバッカスや詩的灵感だけではない。たとえば、カトゥルルスの詩編61は祝婚歌となっており、当時の結婚のさまざまな風習を細かく述べている。新婦は家の敷居をまたいで中に入るときに家の鍵をもらうことでその家の主となるのだが、その中に、結婚の行列を導く神ヒュメナイオスへ新婦を家へ招きいれるようにと呼びかける一節があ

74 Horace, *Épîtres*, I, 3, v.24-25 : « [...] seu condis amabile carmen, / prima feres hederae victricis praemia. [...] », « soit que tu composes un agréable poème, tu emporteras le premier le lierre, prix de la victoire. » note 3 : « ce ci ne s'applique exactement qu'à la dernière hypothèse, puisque la couronne de lierre ne récompensait que les poètes (cf. *Od.* I, 1, 29). »

75 Ovide, *Les Fastes*, V, v.79-80 : « à la tête de son chœur, Calliope, couronnée de lierre et cheveux épars, s'exprima ainsi ».

76 Ovide, *Les Amours*, III, 9, v.61-62 : « [...] in Elysia valle Tibullus erit. / obuius huic venias hedera juvenalia cinctus / tempora cum Calvo, docte Catulle, tuo », « Tibulle habitera dans le vallon élyséen. Au-devant de lui, ton jeune front couronné de lierre, tu viendras avec ton cher Calvus, docte Catulle. » 詩人の栄光としての木葛の冠。訳は『ローマ恋愛詩人集』、中山恒夫訳、アウロラ叢書、国文社、1985。

77 Ovide, *Métamorphoses*, V, v.338. « (Calliope) se lève, rassemble avec un rameau de lierre ses cheveux épars ».

る。そこでは、「新郎の熱い心を恋の絆で繋ぎ、木葛が一本の木をその蔓でしっかりと包み込むように」という記述がある<sup>78</sup>。また、同じ詩編内に葡萄（これもバッカスの属性である）についても「しなやかな葡萄の蔓がそばに植えられた木に絡みつくように、あなたの手で新郎を抱きしめなさい」*«[...] velut assitas / vistis implicat arbores, / implicabitur in tuum / complexum.»* という一節があり、木葛、葡萄の蔓が「愛し合う者同士の抱擁」や「堅い結びつき」と関連づけられている。ロンサールにも出てきたが、木葛が他の木に絡む話を、恋人や愛するもの同士の堅い結びつきや抱擁へと関連づけて用いる使い方はすでにカトゥルスにあったのである。

オウィディウスの『転身物語』第4巻にはサルマキスとヘルマプロディトゥスの話がある。サルマキスは泉の妖精であり、ヘルマプロディトゥスはメルクリウスとヴィーナスの息子である。サルマキスはある時ヘルマプロディトゥスに出会い、すぐさま恋に落ち、この少年が泳ぐ姿を見て、その裸身を抱きしめたいという激しい情欲を覚える。そして水の中で嫌がるヘルマプロディトゥスを、「木葛が太い木に絡みつくように」*«utve solent hederæ longos intexere truncos»* 抱きしめるのである<sup>80</sup>。

また、ホラティウスは、ヌミダの帰還を祝う宴で、ヌミダの恋人ダマリスを形容して、「たおやかな葛よりもっとしなだれかかって、あたらしい情人（ヌミダ）から割かれはしまい」と歌い<sup>81</sup>、また別の詩編では、「（彼女は）高く伸びた樅の木に木葛が絡みつくよりも、もっとしっかりと柔らかな手で私に絡みついて」と歌っている<sup>82</sup>。やはり、木葛は愛する者同士の強い結びつきを象徴している。

他にも木葛については、ホラティウスが盛りを過ぎた女を歌った詩編で、若者達が常緑の木葛や栗色のミルトを好むという一節があり、青春の象徴ともなっているなど<sup>83</sup>、さまざまな象徴としての働きを持つ。しかし、使われ方としては、バッカスの象徴、詩的靈感の象

78 Catulle, *Carmina*, 61, v.34-35 : « ac domum dominam voca / coniugis cupidam novi, / mentem amore revinciens, / ut tenax hederæ huc et huc / arborem implicat errans. », « comme le lierre tenace enveloppe un arbre de toutes parts dans ses replis errants. »

79 Catulle, *Carmina*, 61, v.102-103 : « comme la vigne flexible enlace les arbres voisins, tu l'enlacieras de tes bras. »

80 Ovide, *Métamorphoses*, IV, v.365 : « tel le lierre embrasse le tronc des grands arbres ».

81 Horace, *Carmina*, I, 36, v.18-20. « [...] nec Damalis novo / divelletur adultero / lascivis hederis ambitiosior. », « mais rien ne détachera de son nouvel amant Damalis plus enveloppante que le lierre lascif. » 訳については『歌章』、藤井昇訳、現代思潮社、1973。

82 Horace, *Épodes*, IV, v.5-6. « artius atque hederæ procera adstingitur ilex / lentis adhaerens brachiis, », « attachée à moi de tes bras flexibles plus étroitement que lierre n'étreint l'yeuse élançée, »

83 Horace, *Carmina*, I, 25, v.19-18. « laeta quod pubes hederæ virenti / gaudeat pulla magis atque myrto. », « parce que la florissante jeunesse se réjouit davantage du lierre verdoyant et du myrte sombre ».



微<sup>84</sup>、恋人あるいは愛する者との強い結びつき（あるいは抱擁）の象徴という3つの基本的なタイプがあることがわかる。しかしそれでも木蔦が恋のメッセージの媒体として使用される例は見つからなかったのである。

## 7. ロンサールにおける木蔦

前章では古典古代における木蔦の使われ方を見てきたが、古典古代に強く惹かれ、引用、模倣を繰り返したロンサールには、ネオ・ラテン詩人やイタリアの詩人の影響もあり、同じような木蔦の使い方がかなり頻繁に現れている。

たとえば、『続恋愛詩集』ソネ XLVII では明らかに木蔦は恋人との堅い抱擁を象徴している。

Vous triomphez de moy, & pource je vous donne  
Ce lierre, qui coule & se glisse à l'entour  
Des arbres & des murs, lesquels tour dessus tour,  
Plis dessus plis il serre, embrasse & environne.  
A vous de ce lierre appartient la Couronne.  
Je voudrois, comme il fait, & de nuit & de jour  
Me plier contre vous, & languissant d'amour,  
D'un nœud ferme enlasser vostre belle colonne.  
Ne viendra point le temps, que dessous les rameaux,  
Au matin où l'Aurore esveille toutes choses,  
En un ciel bien tranquille, au caquet des oiseaux  
Je vous puisse baiser à lèvres demy-closes,  
Et vous conter mon mal, & de mes bras jumeaux  
Embrasser à souhait vostre yvoire & vos roses ?<sup>85</sup>

しかし、ロンサールにおける木蔦の使用法は、上記のような抱擁のイメージばかりというわけではない。以下ではロンサールの木蔦の使われ方をタイプに分けて見て行くことにする。

84 たとえばウェルギリウスでは以下の部分に蔦 *hedera* が詩的靈感の象徴、詩人への祝福として現れる：  
Virgile, *Bucoliques*, III, v.39 ; IV, v.19 ; VII, v.25, - Pastores, *hedera crescentem ornate poetam* -, - Bergers, parez de lierre le poète naissant -; VII, v.38 ; VIII, 12, - *atque hanc sine tempora circum inter victricis hederam tibi serpere laurus* -, - et souffre qu'autour de tes tempes ce lierre se glisse parmi les lauriers de la victoire - ; *Géorgiques*, II, v.258 ; IV, v.124.

85 T17, p.327, sonnet XLVII, v.1-14.

## 7.1. 抱擁、堅い結びつき

まず、最初の引用例に続き、1548年9月20日のAntoine de BourbonとJanne de Navarreの結婚を主題とした祝婚歌にも木蔭が堅い結びつきを表す一節がある<sup>86</sup>。この一節は最後のかけ声で容易に理解できるように、すでに見たカトゥルスの祝婚歌を背景にしたものであり、緊密な結びつきを示唆するものとなっている。モデルとしたカトゥルスと同じように、葡萄(の蔓)が木蔭と同じ位置づけで使用されている。この例に見る「堅い結びつき」、「抱擁」のイメージは他にも見られ、カトゥルスの一節はロンサールの作品の中で繰り返し使用されている。たとえば、*Pour les nopces*はオーストリア家Maison d'AutricheのPhilippe IIとヴァロワ家Maison de ValoisのElisabeth de Franceとの結婚(1559年)に際して書かれたもので、ここにも堅い結びつきを象徴する木蔭が出ている<sup>87</sup>。また、*Tombeau de Marguerite de France*でも、Elisabeth de FranceとPhilippe IIの結婚に触れている場面があり、ここは明らかにカトゥルスの『祝婚歌』が背景となっている<sup>88</sup>。1550年の『オード集』第2巻においても、木蔭は強い結びつき、抱擁へと読者を導くものとなっている例がある。木蔭は強く絡みつく。そしてその絡みつきよりももっと、もっと強く、という強い絆と抱擁を求め、この一節は「Un baiser mutuel / Nous soit perpetuel.」と続くのである<sup>89</sup>。1550年の『叢林集』の*D'un rossignol abusé*にも抱擁を象徴する木蔭が、やはり葡萄(の蔓)と共に現れている<sup>90</sup>。*Chanson en faveur de Mademoiselle de Limenil*に現れる一節も明らかに「抱擁」のイメージで

86 T1, p.15-16, *Épithame d'Antoine de Bourbon et Janne de Navarre*, v.111-120 : « Afin que le neu blanc / De foy loyale assemble / De Navarre le sang / Et de Bourbon ensemble, / Plus étroit que ne serre / La vigne les ormeaux. / Ou l'importun lierre / Les apuyans rameau, / O Hymen, Hyménée : / Hymen, ô Hyménée. »

87 T9, p.201, *Inscription, Pour les nopces* : « Vien Hyménée, & d'un estroit lien / Comme un lierre estroitement assemble / Le sang d'Autriche au sang Valesien, / Pour à jamais vivre en repos ensemble. »

88 T17, p.74, v.212-219 : « Ja l'Olivier tenoit la place des Lauriers / Aux portaux attaché : au croc pendoient les armes, / Et la France essuyoit ses plaintes & ses larmes. / Ja le Palais estoit pour la nopce ordonné, / Le Louvre de Lierre & de Buis couronné : / Desja sa fille au temple espouse estoit menée, / On n'oyoit retentir que la voix d'Hyménée, / Hymen, Hymen sonnoit par tous les carrefours ». Catulle, *Carmina*, 61, v.34-35. この点に関しては Laumonier 版にも Pléiade 版にも注はない。

89 T1, p.249, ode XXV, v.7-16 : « Plus fort que le lierre / Se grimant à l'entour / Du chesne aimé, qu'il serre / En maint enlassant tour, / Courbant ses bras épars / Sus lui de toutes pars, / Serrés mon col maitresse, / De vos deus braz pliés, / D'un neud qui tienne & presse / Lasses-le & liés. »

90 T2, p.169, Bocage V, *D'un rossignol abusé*, v.99-102 : « Qu'ell'me serre, qu'ell' m'enchéne / (Comme un lierre le chéne, / Ou la vigne les ormeaus) / Mon col, de ses braz jumeaus. »

あり<sup>91</sup>, *Élégie* にも抱擁を意味する木葛がある<sup>92</sup>。

*La bouquinade* では恋の神アモルを歌っている。アモルは森の神バーンやサテュロスたち、牧神たちを屈服させ、それ以来、彼らはニンフたちに恋をして追いかけるようになり、そして葡萄が楡の苦木に、木葛が楡に絡みつくようになったという。恋と抱擁の象徴である<sup>93</sup>。 *Sur une médaille d'Antinous* で歌われた Antinous はハドリアヌス帝の寵愛を受けたギリシアの美青年である。ナイル川で溺れ死ぬが、ハドリアヌスはこの青年を神の地位に列席し、神殿を建て、この青年の名前を持つアンティノポリスという都市を建設し、帝国中に Antinous の像を建てさせた。この詩編では Henri III の同様な趣味を暗に皮肉っており、この美青年の死と木葛の絡みつきとがうまく組み合わせられている。ここでの木葛は楡に堅く絡みついて、ついには楡を枯死させてしまう。やや他とは異なるが、堅い結びつき、抱擁という分類に入ることは明らかだろう<sup>94</sup>。 *La Franciade* では、恋人同士の愛とは違って、母子の愛となっている珍しい例であるがやはり抱擁の堅さを示すものとして使用されている<sup>95</sup>。『純恋愛詩集』ソネ LX では、一見すると単なる自然描写のようにも見えてやや曖昧ではあるが、あとに続く部分で鳥たちの愛の語らいと、恋人と一時でも離れただけで苦しいという話が展開されるので、ここでも木葛に一時も離れぬ結びつきや抱擁の象徴を見ることができるだろう<sup>96</sup>。

## 7.2. 栄光、栄誉、詩的靈感

また一方では、木葛は古典作品に見られた例と同じように詩的栄光、詩的靈感を象徴するものとして幾度も使用されている。 *De feu Lazare de Baif, A Caliope* では、神々が一人の人間

91 T12, p.166, *Chanson en faveur de Mademoiselle de Limeuil*, v.55-60 : « Quand je voy les grands rameaux / Des ormeaux / Qui sont serrés de lierre, / Je pense estre pris aux lacs / De ses bras, / Quand sa belle main me serre. » lacs は piège の意で重複同形。

92 T17, p.380, *Élégie, Voicy le temps, Candé, qui ...*, v.9-14 : « Ne vois-tu pas comment ces Vignes enlasees / Tiennent de grands Ormeaux les branches embrassees ? / Regarde ce bocage, & voy d'une autre part / Les bras longs & tortus du lierre grimpart / En serpent se virer à l'entour de l'escorce / De ce chesne aux longs bras, & le baiser à force. »

93 T18, p.399, *La bouquinade*, v.197-200 : « [...] et depuis les rameaux / De la vigne lascive embrassent les ormeaux, / Depuis le froid lierre estroitement enchesne, / Eschauffé de l'amour, le ridé tronc de chesne. »

94 T18, p.413, *Sur une médaille d'Antinous*, v.58-62 : « Malheureux jouvenceau ingratement aimé, / Comme un chesne aux forests d'un lierre enfermé, / Qui si fort en ses neuds l'entortille & le serre / Qu'à la fin, mort & seq, trebuche contre Terre. »

95 T16, p.77, *La Franciade*, v.959-962 : « Cette Andromache à qui l'estomac fend / D'aize et d'ennuy, accoloit son enfant / A plis serrez, comme fait le l'hierre / Qui bras sur bras les murailles enserre. »

96 T7, p.177, sonnet LX, v.1-2 : « Je mourois de plaisir voyant par ces bocages / Les arbres enlaseés de lierres épars. »

の死に涙するならば、いまこそその時であると詩を始め、パイフの栄光が不滅となるように歌ってくれと詩神カリオベに願う。そしてその続きとして、「幾重にも、棺の周囲に葛が絡み育ちますように。夜も昼も、休みなく、無知と戦ったのだから。」と祈る<sup>97</sup>。この時、木葛は詩的靈感の象徴であり、学識の象徴であり、さらには栄光をも担っている。*De l'élection de son sépulcre* は自分が死んだときに墓を建てるならば故郷の Vandômois がいいと故郷を讃えるものだが、その中でロンサルは死後の自分の体から木葛が生えるようにと祈っている。ここでは同じように葡萄が自分の墓を木陰にしてくれるようにと祈っている<sup>98</sup>。どちらも葛の絡みつくイメージなのだが、ここでは堅い結びつきや抱擁を示すものではなく、木葛と葡萄はバックスと詩との関係を背景として、むしろ詩的靈感、詩的栄光を示すものとなっている。

*Élégie sur le trépas d'Antoine Chateignier* では詩編冒頭部から 51 行まではオウィディウスの『恋の歌』第 3 巻第 9 詩編のパラフラーズになっている<sup>99</sup>。しかし、木葛の現れる 173 行目はその範囲にはなく、ここはホメロスの『イーリアス』第 23 巻の一節を背景にしているとされる<sup>100</sup>。「もしも私がアキレウスなら」- *si j'étais Achille* - という言葉で、ロンサルは Antoine Chateignier との関係をアキレウスとパトロクロスの関係になぞらえて行く。アキレウスはヘクトールに討たれたパトロクロスの葬儀を行うのだが、その場面になぞらえられているのである。しかし背景となったホメロスには木葛は出てこないで、この場面での木葛はロンサルが詩人であった Antoine Chateignier の（詩的）栄光を讃えるために入れたものであろう<sup>101</sup>。*Épithaphe de Michel Marulle* では最初の部分はローマ時代の墓碑銘によくある銘であり、オウィディウスの『恋の歌』第 3 巻第 9 詩編を参考にしたとされているが、オウィディウスのこの場面には木葛はない。しかしその直前には、先に古典古代における木葛の例を検討した際に、詩的栄光としてあげた木葛の使用例がある。ここでネオ・ラテン

97 T2, p.61, ode XXII, *De feu Lazare de Baif, A Caliope*, v.13-18 : « En maint tour, / Alentour / Du cercueil croisse l'ierre. / Nuit, & jour / Sans séjour / A l'ignorance il eut guerre. »

98 T2, p.99, ode V, *De l'élection de son sépulcre*, v.33-40 : « De moi puisse la terre / Engendrer un l'hierre, / M'embrassant en maint tour / Tout alentour. / Et la vigne tortisse / Mon sepulcre embellisse, / Faisant de toutes pars / Un ombre épars. »

99 T5, p.244, note 2 : « Dans ce début et la suite, jusqu'au vers 51, Ronsard a paraphrasé les vingt-huit premiers vers de l'élégie d'Ovide sur la mort de Tibulle, *Amores*, III, IX. »

100 T5, p.251, note 4 : « Cf. Homère, *Il.* XXIII, 140 et suiv. »

101 T5, p.251, *Élégie sur le trépas d'Antoine Chateignier*, v.171-174 : « Reçois, mon cher Patrocl, au milieu de ce pré / Ce neuf autel à ton nom consacré, / Qu'humble je te dedie avec ce lierre / Et ce ruisseau qui par neuf fois l'enserre. »

詩人 Marulle の墓に絡みつく木葛はもちろん詩的栄光を象徴するものである<sup>102</sup>。 *Épitaphe de Jan de la Péruse* での木葛は早世した詩人である死者に栄光を与えるためであり、ここでは木葛は詩的栄光を象徴している<sup>103</sup>。 *Élégie, Puisque Dieu ne m'a fait...* で木葛が現れるのは、ロンサルが詩作にうつつを抜かしているとしてまだ若かったロンサルに父が文句を言う場面である。ロンサルの父にとっては、詩神たちはせいぜいミルトか木葛の冠を与えるか、ひがな一日泉のほとりで無為に過ごしているロンサルに詩のネタを与えるのがせいぜいではないか、という場面で使用されている。木葛の冠であるから、父親にとってはなんの役にも立たないものではあるが、ここはもちろん詩的靈感、詩的栄光の象徴である<sup>104</sup>。

*Éclogue du Thier* では Bellot, Perrot, Bellin の 3 人の牧人の対話となっている。これらの 3 人の名前はそれぞれ Du Bellay, Pierre (de Ronsard), Belleau に対応している。Bellot と Perrot は樅の木陰で休息をとっている。そこへ迷った羊を連れて戻る途中の Bellin がやってくる。そして樅の木陰で一緒に休むように勧めるのだが、もしこの木陰がいやならよそへ行こうかと近くの洞窟をあげる。その洞窟の周囲の描写に木葛が出てくる。この後の Bellin の言葉の中で他の二人に向かって、「二人で牧歌を一つ競ってみてくれ」・ *De vous deux une eclogue à l'envy soit jouée* 》という行があり、さらに直前の詩句には葡萄もでてきており、おきまりの自然描写でありながら、さりげなく詩的靈感を示唆する要素として含まれている<sup>105</sup>。 *Eglogue Daphinis et Thyrsis* の Thyrsis の言葉に現れる木葛は、初版では *« Bergers, d'un Laurier faites une couronne / A ce pasteur croissant »* と月桂樹であったものが木葛に修正されたものである。もととなったウェルギリウスでは月桂樹ではなく木葛になっているのだが、初版の段階ではウェルギリウスの一節の雰囲気強く残しているにもかかわらず木葛ではなく月桂樹が使用されていた。それが 87 年の版ではウェルギリウスにあるように木葛に置き換えられたのである。構文はウェルギリウスとは異なったものになったが、内容的に

102 T6, p.30, *Épitaphe de Michel Marulle*, v.41-44 : « Toujours legere soit la terre / A tes os, & sur ton tombeau, / Se refrisant de meint rameau / Toujours grimpe le vert lierre ». Voir note 1 : « [...] avec une traduction (au vers 41) de la formule latine : « Sīt tibi terra levis », que l'on gravait sur les tombeaux [...] Ronsard en trouvait une variante dans Ovide (élégie sur la mort de Tibulle, *Am.* III, IX, fin) : Et sīt humus cineri non onerosa tuo. »

103 T7, p.95, *Épitaphe de Jan de la Péruse*, v.41-44 : « Et prie que toujours la vigne & le lierre / D'un refrisé rameau / Rempe pour ta couronne au plus haut de la pierre / Qui te sert de tombeau ».

104 T10, p.301, *Élégie, Puisque Dieu ne m'a fait...*, v.27-30 : « Que te sauroient donner les Muses qui n'ont rien ? / Sinon au-tour du chef je ne sai quel lien / De myrthe & de lierre, ou d'une amorse veine / T'allecher tout un jour au bord d'une fontaine ».

105 T10, p.52, *Éclogue du Thier*, v.45-46 : « Les sieges sont de tuf, & autour de la pierre / Comme un passement verd court un cep de l'herre. »

は詩人を祝福する意味で使用されており、詩的靈感、詩的栄光と結びついている<sup>106</sup>。*Élégie à la Roynne d'Escoce* は 1558 年に Dauphin François と結婚して 1559 年にフランス王妃となり、1560 年 12 月に未亡人となった王妃のスコットランドへの帰国を歌ったものである。王妃の帰国は 1561 年 8 月 14 日であった。木蕨は、王妃を連れ帰る舟は、彼女がフランス王妃であった間はフランスに留まっていた詩神たちをも連れ去ってしまったとした一節に続く部分で現れる。ここでは木蕨は月桂樹と共に使用され、詩のジャンルを示すと同時に詩的靈感の枯渇を示すものとして使用されている<sup>107</sup>。

*Sonet au seigneur J. Gassot Secrétaire du Roy* ではロンサルは自分を一人の少女に見立てている。その少女は庭に身を飾る花を探しに行ったが、花はなく、しかたなく木蕨で身を飾るという展開の一節である。木蕨で身を飾るがディオニュソスの狂乱の状態を示すわけではない。この詩の後半で、あなたにふさわしい花はないのだが、この贈り物（この詩編）はむやみに集めた花束よりはいいでしょう、と落ちをつけているので、やや関係は薄いように見えるが、分類するとすれば詩的靈感を示す木蕨であろう<sup>108</sup>。Robert Garnier が悲劇 *Porcie* を 1568 年に出版した際に添えられたソネでは、その榮譽をたたえるには、雄ヤギでは足りず、木蕨でさえも役不足だという。詩的栄光の象徴としての木蕨である<sup>109</sup>。ロンサルは Robert Garnier の悲劇 *La Troade* 1579 年版の巻頭詩でも同様な展開を用いてその詩的榮譽をたたえている<sup>110</sup>。

*L'hymne de tresillustre prince Charles Cardinal de Lorraine* では、公務の合間の休息には古今の作品に目を向ける Cardinal de Lorraine に、詩の神々は競ってその贈り物を与えようとする、と述べる。そして詩神たちを田舎から連れてきた作家たち（つまり田舎からパリへ出てきた詩人たち）の名を告げねば神々の理解は得られないと比喩的に当時のフランスの詩人

106 T12, p.157, *Eglogue Daphnis et Thyrsis*, v.177-180, var.87 : « Bergers, en ma faveur faites une couronne / De l'hierre à mon front : si le Ciel n'est jaloux / De mon age nouveau, qui comme un pré fleuronne / J'espere quelque jour de me voir maistre de vous. » 初版のこのいかにもウェルギリウスの一節の典拠について、Laumonier は送りと与えていない。Pléiade 版は 84 年版を底本としているため laurier となっている。もちろん送りはない。出典はおそらく Virgile, *Bucoliques*, VII,v.25 : « Pastores, hedera crescentem ornate poetam ».

107 T12, p.278, *Élégie à la Roynne d'Escoce*, v.11-14 : « Depuis, nostre Parnasse est devenu sterile, / Sa source maintenant d'une bourbe distille, / Son Laurier est séché, son Lierre est détruit, / Et sa crotte jumelle est sceinte d'une nuit. »

108 T15, p.365, *Sonet au seigneur J. Gassot Secrétaire du Roy*, v.5-8, var. 78-87 : « Mais ne voyant nulle rose nouvelle / Ny d'autres fleurs les jardins embellis, / Prend du lhyerre, & de ses doigts polis / Fait un bouquet pour se faire plus belle. »

109 T15, p.376, *Sonet de Pierre de Ronsard à l'auteur*, v.5-6 : « Le bouc n'est pas digne de son bonheur, / Le lierre est trop basse recompance. ».

110 T18, p.333, v.3-4. « Le lierre est trop bas pour ton front couronner / Et le bouc est trop peu pour ta Muse tragiques. »

たちの功績を讃えている。詩人たちが栄誉を得たのはバリに出てきて Cardinal de Lorraine と近づきになったためだとしている。この時、当初に詩神たちがいた田舎とは今バリに出てきている詩人たちの出身地を意味するが、その形容のなかに木蔦が現れている。ここではもちろん木蔦は草深い田舎を示す要素でもあるが詩的・文学的靈感の象徴でもある<sup>111</sup>。

Angelot(Duc d'Anjou) が le bon Henriot(= Henri II) の早すぎる死に触れ、羊飼いたちに彼のために墓を建てよと呼びかける場面では、傍らを流れる小川は実をつけた葡萄の枝と木蔦の作る木陰の下を流れねばならないのであり、王の栄光を示唆する役割を担っている<sup>112</sup>。

以上のように、抱擁、堅い結びつき、栄光・栄誉を表す木蔦はロンサールにも多くの例がある。しかしその一方で、木蔦とバッカスとの関係やバッカスの眷属、持ち物に属性として付加されている木蔦も多い。

### 7.3. バッカスとの関係

たとえば *La Franciade* では Charles IX の業績をたたえるため、ヘーラクレースと共にバッカスを引き合いに出すが、そこではバッカスは « l'Indian remparé de lierre » とされ、木蔦があることでバッカスを指し示すかたちになっている<sup>113</sup>。

*L'Hinne de Bacus* はタイトルどおりバッカスを歌ったものなので、木蔦が出てきても不思議はないのだが、69 行から 76 行にかけては、先に示したオウィディウスの『祭暦』でバッカスと木蔦の結びつきの理由を示した部分をもとになっている。バッカスはセメレーの子である。怒り狂ったヘーラー（ジュノー）の目から隠すために、バッカスを預かったアタマースが木蔦で覆ったのである。そしてそれが理由でバッカスは木蔦を自分の聖木としたという話である。したがってここはバッカスとの関連での使用例である。しかし、ここで示された

111 T9, p.52, *L'hymne de tresillustre prince Charles Cardinal de Lorraine*, v.423-434 : « Il seroit bien ingrat & n'auroit pas esté / De Jupiter conceu, de Memoire allaité, / S'il ne te confessoit son Seigneur & son maître, / Qui l'as fait deloger de son manoir champestre, / Barbare & mal en point, qu'un pauvre ruisselet, / Qu'un lhierre, une mousse, un laurier verdelet / Entournoit seullement, qui n'avoit en partage / Qu'un lut mal façonné, & qu'un antre sauvage, / Ton Meudon maintenant le sejour de la Muse, / Meudon qui prend son nom de l'antique Meduse ».

112 T13, p.75, note 2 : « [...] Angelot, c'est le prince François, alors duc d'anjou, le dernier des fils de Henri II [...] » ; p.97, note 2 : « [...] Il s'agit du roi Henri II, frappé à mort dans un tournois (juin-juillet 1559) » . T13, p.99, *Bergerie*, v.451-454 : « Pasteurs, en sa faveur semez de fleurs la terre, / Ombragez les ruisseaux de pampre & de lierre, / Et de gazons herbus, en toute saison vers, / Dressez luy son tombeau & y gravez ces vers ».

113 T16, p.41, *La Franciade*, v.258. これだけでは意味不明だが、注にもあるようにバッカスはインド東部を征服したとされる。Note 5 : « Bacchus, vainqueur des Indes orientales, d'après Pausanias, X, 29, 4; Ovide, *Mét.* IV, 20 sq. »

木蔦の「保護」という機能は他の詩編でも用いられている<sup>114</sup>。*L'Hinne de Bacus* では他にも木蔦の出現する場面があるが、それはバッカスの属性としてこの神の描写に用いられている場合<sup>115</sup>、ディオニュソスの狂乱の場面<sup>116</sup>、ディオニュソスの狂乱の状態を描写するためである<sup>117</sup>。また、バッカスに付き従う者は蔦に身を飾ってバッカスの名を叫んで踊り狂うのである<sup>118</sup>。

『続恋愛詩集』ソネ XIII は、想い人を思い出して大酒を飲もうという話である。Cassandre, Marie, の名をあげて、その名前の文字数だけ杯を傾けようという話で、葡萄と木蔦が共に出現し、以下は大いに騒ごうという趣旨をこの二つの植物を利用してバッカスの狂乱になぞらえた部分である<sup>119</sup>。*L'Hymne de l'Autonne à Monsieur de Lauvespine* では両親に会うため、そして未来の夫を探すために旅に出た秋 Autonne がバッカスに出会う場面で木蔦はバッカスの杖 Thyrsis の描写に使用されている<sup>120</sup>。*Dithyrambes* ではバッカスの犠牲に捧げられる雄ヤギの角は木蔦で飾られており、バッカスの司祭・巫女たちは木蔦で飾ったテュルススの杖を持ち、バッカスに従う野生の卑猥な者たちは木蔦で身を飾っている<sup>121</sup>。

こうしてバッカスおよびバッカスと関わりをもつものの描写に木蔦は一種の約束事として現れるが、一方では特に強い意味をもたずに自然描写の中に現れてもいる。

114 T6, p.180, *L'Hinne de Bacus à Jean Brinon*, v.69-76 : « Athamante soudain le tapit contre terre, / Et couvrit le berceau de feuilles de l'herrie, / De creinte que Junon en charchant ne le vist, / Et qu'englotir tout vif à son chien ne le fist / Ou de peur qu'autrement ne lui fist quelque offence : / Et depuis ce tems là Bacus pour recompense, / A bon droit sur tout arbre a pour le sien eleu / (Come l'ayant sauvé) le l'herrie feuillu. » ; note 1 : « Ovide, *Fastes*. III, 767 et suiv. »

115 T6, p.182, *L'Hinne de Bacus à Jean Brinon*, v.113-115 : « Un Manteau Tyrian s'ecouloit sur tes hanches, / Un chapelet de liz miellés de roses franches, / Et de feuille de vigne, et de l'herrie espars, / Voltigeant, umbrageoit ton chef de toutes pars. »

116 T6, p.186, *L'Hinne de Bacus à Jean Brinon*, v.191-192. « Qu'un beguin couleuvré me serre les cheveux, / Herissés de l'herrie entre frisé de neuds, ».

117 T6, p.243, v.7-9. « Je ne veux sinon que tourner / Par la dance, & me couronner / Le chef d'un tortis de l'herrie : »

118 T5, p.46, *Folastrie VII*, v.83-86. « Ce nest pas moy, las! ce n'est pas / Qui dedaige suivre tes pas / Et couvert de l'herrie brère / Par la Thrace Evan [...] ».

119 T7, p.131, sonnet XIII, v.9-12 : « Qu'on m'ombrage le chef de vigne, & de l'herrie, / Les bras, & tout le col, qu'on enfleure la terre / De roses, & de lis, & que dessus le jonc ».

120 T12, p.63, *L'Hymne de l'Autonne à Monsieur de Lauvespine*, v.381-385 : « Devant ce Roy dansoyent les folles Edonides, / Les unes tallonnoyent des Pantheres sans brides, / Les autres respandoient leurs cheveux sur le dos, / Les autres dans la main branloient des javelots, / Herissés de l'herrie & de feuilles de vigne : ». ここはバッカスとアリアドネーの話が背景にあるのは明らかだが、Pléiade 版も Lau-monier 版でもこの点に関しては注はない。

121 T5, p.61, *Dithyrambes*, v115-116 : « un Bouc aux cornes dorées, / De l'herrie décorées » ; p.61-62, v.125-127. « Mais qui sont ces enthyrssés, / Herissés / De cent feuilles de l'herrie » ; p.55, v.19-22 : « Et les Sylvans [...] Tous herissez de l'herrie ».



#### 7.4. 自然描写, その他

*Ode à Nicolas Denizot du Mans* ではカッサンドラが病気になるって眠れないのを考えると苦しいと述べ、友人と一緒に「眠り」に捧げられたケシを摘みに行かないか、と誘っている<sup>122</sup>。その野にはケシが豊富にあり、十分に摘んだ後、「眠り」に対して祭壇を設けるのである。この祭壇に関わる部分はホラティウス『歌章』の「ここに刈りてなおみずみずしき芝を、ここに葉茂き小枝を」・*hic vivum mihi caespitem, hic verbenas* から来ている。ホラティウスには木葛 *hedera* の語は無いが、ここは祭壇を作るための芝と供犠の儀式にもちいる聖木のことである。木葛は「眠り」への祈りの儀式のための聖木の位置づけで使用されている。*Le Cyclope amoureux* では恋の苦しみを癒す葉はなく、恋は貴賤の区別無く訪れるものとしてロンサールはキュクロプスと海のニンフであるガラテアの恋を歌う。キュクロプスがガラテアに向かって自分の洞窟を訪れるようにいざない、自分の洞窟がいかに素晴らしい場所かを描写する場面に野葡萄と共に木葛が現れている。ここでの木葛は他の自然描写の例に漏れず、平穏で優しくひそやかな自然描写の要素となっている<sup>123</sup>。*L'hydre deffaict ou la Louange de Monseigneur le duc d'Anjou, frere du Roy* では、Henri II とカトリーヌ・ド・メディシスの子であり、シャルル9世の弟であり、未来のHenri IIIであるDuc d'Anjouを歌っている。このころ、Duc d'Anjou（後のHenri III）にはポーランド王になる話が進んでいた。この木葛はブレイヤード版によれば栄光の象徴だが、栄光のみに限定的にとらえるべきではないだろう。ここにはバックスを隠した木葛の役割から、守護の意味もあるように思われる<sup>124</sup>。*Eglogue, Les pasteurs Aluyot et Fresnet* ではFresnetの言葉の中に木葛が現れる。野葡萄と共に洞窟の入り口の描写に使用されているのは*Le Cyclope amoureux* と同じであるが、入り口が葛や葡萄類に覆われていることは、ここでは入り口が分からない＝安全という比喩的な意味を持つとも考えられるだろう<sup>125</sup>。

122 T7, p.198-199, *Ode à Nicolas Denizot du Mans*, v.9-10 : « [...] aporte du lierre, / Puis de gazons herbus maçonne un autel vert, » ; note 1 : « Souvenir d'Horace, *Carm.*, 1, XIX, fin. Cf. le début d'une ode de 1550 « de la convalescence d'un sien ami » (tome II, p. 40). »

123 T10, p.285, *Le Cyclope amoureux à Charles d'Espiray*, v.188-190 : « [...] & les sapins / Font umbrage à l'entrée, où le tortu l'hydre / Avecques la lambrunche en mille plis se serre ».

124 T15, p.378, *L'hydre deffaict ou la Louange de Monseigneur le duc d'Anjou, frere du Roy*, v.12-19 : « Fils de Henry, que Mars dès son enfance / (Comme sa race) en son giron nourrit, / Et le mestier des armes luy apprit. / Et couronnant son berceau de lierre / Et de laurier, le fist naistre à la guerre. / Ainsi jadis le grand Saturnien / Fut alaité dans l'autre Dictien, / Entre le bruit des boucliers & des armes : ».

125 T12, p.98, *Eglogue, Les pasteurs Aluyot et Fresnet*, v.91-92 : « J'ay pour maison un Antre en un Rocher ouvert, / De lambrunche sauvage & d'hyerre couvert ». Aluyot と Fresnet は note 1 : « les deux Secrétaires d'État, Robertet d'Aluye et Robertet de Fresne, auxquels R. a dédié les hymnes du Printemps et de l'Esté. Je rappelle qu'ils étaient cousins issus de germains, et non pas frères comme on est tenté de le croire [...] ».

*Élégie à la Majesté du Roy mon maistre* では若くして王位に就くことになった Charles IX を勇気づけ、他の国々について語る場面がある。ここでは月桂樹はアポロンを、木蔭はバッカスとの関連を示し、それぞれギリシア、インドを象徴していると考えられる<sup>126</sup>。

*Élégie ou amour oyseau au capitaine* は、実際の暑さと恋の熱に苦しんでいるが、実際の暑さは消すことができる、と始められる。暑さを忘れるためには泉へ行くかニンフやバーンの住処である木蔭の絡まる洞窟を探して森へ入りさえすればいいのであり、自然描写の一要素である<sup>127</sup>。*Le Houx à Jean Brinon* では Jean Brinon の家の庭のヒイラギ houx が歌われている。ヒイラギはもとはニンフであったとして、ニンフから木への変身の物語を歌う。もとはディアーナの弓持ちであった美しいニンフだが、ジュピターの猛犬（酷暑の隠喩）を避けようとして逃げ込んだ洞窟でバーンに純潔をけがされてしまう。彼女が逃げ込んだ洞窟の入り口に木蔭は現れる。ここでは木蔭は守護の役にはたっていないので、人里離れた洞窟の描写の要素としての使用である<sup>128</sup>。1578 年以降の総作品集、*Les Amours Diverses* に収録されているソネ XVIII でも洞窟の装飾である<sup>129</sup>。*Discours* でも世間のしがらみから離れた居心地の良い場所を表現する際の要素としての木蔭がある<sup>130</sup>。オウィディウスのナルキッソスの話に題材をとった *Le Narssis pris d'Ovide* では、ナルキッソスが水面に映った自分に向かって、水の中から出てくるように呼びかけ、水の外の岸辺の様子を描写する一節に木蔭が現れる。ここでの木蔭は他の木に絡みついてもおらず、この部分は詩的栄光・靈感でもなく、心地よい自然の描写の一要素として現れている<sup>131</sup>。

ここまで、ロンサールにおける木蔭の使われ方を見てきた。抱擁、堅い結びつき、栄光・栄誉、バッカスとの関連、さらには自然描写での利用と、ロンサールには古典古代の作品に

126 T13, p.137, *Élégie à la Majesté du Roy mon maistre*, v.117-120 : « Là vous voirrez mille peuples divers / D'habit, de meurs, de langage, couverts / L'un de Laurier & l'autre de Lierre, / Vous saluer le Seigneur de leur terre ».

127 T15, p.207, *Élégie ou amour oyseau au capitaine Le Gast de Daupiné*, v.1-7 : « La chaleur de mon front ne me donne grand peine, / Car je la puis estaindre aux flots d'une fontaine, / Ou cherchant par les bois les Antres bien couverts, / Herissez de lierre & de feuillages vers, / Des Nymphes & des Pans les maisons solitaires. » バーンはバッカスの眷属でもあるが、ここではバッカスとの関連は薄い。

128 T6, p.138, *Le Houx à Jean Brinon*, v.63-66 : « Davant cet antre pendoit / Un vieil cep, qui rependoit / Ses bras tortus jusqu'en terre / Entrelassés de lierre ».

129 T17, p.303, *Les Amours Diverses*, sonnet XVIII, v.3 : « L'herbe, le tapis d'un bel antre sauvage ».

130 T18, p.131, *Discours*, v.49-51 : « [...] nostre hermitage / Tapissé de lierre & de vigne sauvage, / Séjour plus gracieux que ces braves châteaux ».

131 T6, p.79-80, *Le Narssis pris d'Ovide*, A François Charbonnier, Angevin, v.123-126. « Ici la torte vigne à l'orme s'assemblant / De tous costés épand un ombrage tremblant, / Ici le verd lierre, & la tendrette mousse / Font la rive sembler plus que le sommeil douce. » Laumonier 版では note 1 : « Souvenir de Virgile, *Géorg.* I, 2 : ulmisque adjungere vites ; *Buc.* v. 5 : sub incertis zephyris motantibus umbras. » とあるが、ここでは木蔭が榎の木に絡みつく *Géorgiques*【農耕詩】への送りはふさわしいとはいえない。

出てきた利用法のほとんどが現れている<sup>132</sup>。しかし、その一方で、木蔭と恋のメッセージとを関連づけるような使用法は見つからなかった。

#### 8. ロンサールにおける葡萄

ロンサールの詩編に「椈の木に絡まる葡萄」が出てくる毎に、その参照先として何度も Laumonier 版があげる一節がウェルギリウスの『農耕詩』にある<sup>133</sup>。しかしこの部分は基本的には農業と気象の話であり、愛や抱擁と関連する文脈ではない。また、同じウェルギリウスの『牧歌』でも葡萄と椈の木に言及する一節があるが、これも農業的視点での話である<sup>134</sup>。また、オウィディウスの『転身物語』X巻には、ニンフたちに愛されていた大鹿を誤って殺してしまったキュバリッスが糸杉に転身する話がある。物語の舞台となる丘の描写で、もとは木陰などなかったが、オルフェウスが歌うことによって様々な樹木が茂ったとする記述があるが、その樹木の中に「葡萄の絡まる椈」・ *amictae vitibus ulmi* がある。しかしこれも愛や抱擁を意識したものではない<sup>135</sup>。

愛や恋との関連で椈の木と葡萄がでてくるのは同じオウィディウスの『転身物語』XIV巻のボモナの話である。ハマドリュアデスの中でも園芸に堪能なボモナは野原とたわわに実をつけた小枝にばかり心を向け、恋愛にはいっこうに無関心で果樹園の中に閉じこもっていた。山野の精や牧神たちが彼女の心を得ようとあらゆる手を尽くしたがうまくゆかない。とりわ

132 Du Bellay の木蔭の使用はロンサールに比べてひどく変化が少ない。興味を惹くのは堅い結びつきを示す1例のみである。以下はすべて Chamard 版からの引用である。T.3, p.90, *A la Roynie*, v.73-78 : « O Dieux, combien est heureuse / La belle étoile amoureuse / Qui plus fort que les ormeaux / La vigne n'estreint & lie, / Vous tient, & que ne s'alie / L'hyerre à ses prochans rameau. » ; t.3, p.30, *Du jour des bacchanales*, v.10-12 : « L'Indique Dieu, qui erre / Le chef environné / De Verdoyant lierre » ; t.4, p.118, *Hymne chrestien*, v.187-188 : « un autel de terre / Encourtiné de verveine & d'hyerre » ; t.2, p.289, *A P. de Thyard et G. des Autels*, v.7-8 : « consacrer d'une Sainte l'honneur / Sur telz Autels encourtinez de l'hyerre » ; t.3, p.111, *L'avantretour en France de Monseigneur reverendiss. Cardinal Du Bellay*, v.64-65 : « Sus donq', qu'un autel on m'appreste / D'hyerre à la racine velue » ; t.5, p.53, *Chant de l'Amour et de l'Hyver*, v.64-65 : « Sur l'autre sont les murs vieux, / Hideux de ronces & d'hyerre » ; t.5, p.295, *Ode sur la naissance du petit Duc de Beaumont*, v.281-84 : « Le bras feuillu du l'hyerre, [...] Ton chef ombrage & enserre. » ; t.3, p.84, *Chant triumpal sur le voyage de Boulongne*, v.175-176 : « l'autel construit de mesme pierre / Encourtiné de laurier & de l'hyerre. »

133 Virgile, *Géorgiques*, I, 2 : « Quid faciat laetas segetes, quo sidere terram uertere, Maecenas, ulmisque adiungere uitis conueniat. », « Ce qui fait les grasses moissons, sous quelle constellation, Mécène, il convient de retourner la terre et d'unir les vignes aux ormeaux ».

134 Virgile, *Bucoliques*, II, 70 : « semiputata tibi frondosa uitis in ulmo est : », « Ta vigne reste à demi taillée sur l'ormeau trop feuillu ». 椈の木は葡萄の木の支柱である。支柱の椈の木の葉が茂りすぎると、葡萄に日があたらなくなる（『牧歌／農耕詩』、小川正廣訳、p.15、注9）。

135 Ovide, *Métamorphoses*, X, 99-100 : « [...] , venistis et una / pampineae vites et amictae vitibus ulmi [...] », « et vous encore, vignes couvertes de pampres, ormeaux vêtus de vignes ».

けボモナに執心なのがウェルトゥムヌス神で、様々に姿を変えてボモナに近づこうとし、ある時、神は老婆に姿を変えて果樹園に入り込む。そしてボモナに向かって榦の木と葡萄の結びつきのたとえを用いてボモナに結婚を勧めるのである。ここでは榦の木も葡萄の木も、どちらか片方だけではうまく行かないという話になっており、ここでの榦の木と葡萄の木の関係は恋愛と重ねられている<sup>136</sup>。

他には先にも言及したカトゥルルスの祝婚歌のような例もあるが、このような、恋愛と関連づけられた葡萄の話は意外にも古典古代の作品にはそれほど多くはないようである。しかしロンサルではあたかも木葛と葡萄は同義でもあるかのように、恋愛と関連づけられている。

葡萄の木（蔓）は72例の出現例があるが、その中のいくつかでは木葛と同等の扱いを受けている。たとえば、*Chant pastral sur les nocces de Monseigneur Charles Duc de Lorraine, & Madame Claude Fille II. du Roy* は、この長いタイトルが示すように一種の祝婚歌である。この詩編には興味深いことに3カ所で「堅い結びつき」や「抱擁」を表す描写が現れている。一つは437行～440行の部分で、「しなやかな葡萄の蔓が榦の木と婚姻を結び、その木の周りにいたるところで絡みつくように、同じようにあなたの腕は幾重にも折り曲がり、素晴らしい夫の柔らかな首を抱きしめる」という展開になっており、この部分は明らかに堅固な結びつきや抱擁を表現している。そしてここには同じ詩編内の349行へと送りがある。そこにはまた同じような表現がある。「広がった木葛があなたの妻を、あなたの首にびったりと結びつけるとき」という表現もやはり結びつきの強さに焦点をあてた描写である。そして、この部分には1584年のヴァリエントが存在しており、「葡萄の蔓が榦の木に巻き付くのもこれほど強くはあるまいというほどに、あなたの首に若妻がしっかりと抱きつく」となっている。つまり、結びつきの堅さ、抱擁の表現としては、葡萄（の蔓）も木葛と同じ役割を担うこと

136 Ovide, *Métamorphoses*, XIV, 661-668 : « ulmus erat contra speciosa nitentibus uvis: / quam socia postquam pariter cum vite probavit, / 'at si stare' ait 'caelebs sine palmite truncus, / nil praeter frondes, quare peteretur, haberet; / haec quoque, quae iuncta est, vitis requiescit in ulmo: / si non nupta foret, terrae acclinata iaceret: / tu tamen exemplo non tangeris arboris huius / concubitusque fugis nec te coniungere curas. », « Il y avait là un orme que décoraient les grappes brillantes suspendues à ses flancs ; il admire cet arbre et la vigne qu'on lui a donnée pour compagne ; Oui, mais si ce tronc, dit-il, était resté célibataire, privé de pampres, il n'aurait rien que son feuillage à nous offrir. Cette vigne, elle aussi, qui repose sur l'orme qu'elle embrasse, retomberait sur elle-même, si on ne l'avait point mariée, et trainerait à terre. Toi pourtant, tu ne te laisses point toucher par l'exemple de cet arbre ; tu fais les plaisirs de l'amour, tu ne veux point d'époux. »

が出来ることがわかる<sup>137</sup>。

したがって、木葛と同様に葡萄についてもどのように使用されているのかをみておく必要がある。ロンサールにおける葡萄の使用法でもっともはっきりとしているのは、この例のように、古典作品に現れ、neo-latin 詩人たちに多用された「堅い結びつき」、「抱擁」を意味する使い方である。

#### 8.1. 抱擁と堅い結びつき

『新統恋愛詩集』のソネ *Hé que voulez vous dire?* では恋のさえずりをあげて飛び回る小鳥たちに、同じ恋の例として椴の若木に絡み抱きつく葡萄の若木の例を重ね合わせて、抱擁を表現している<sup>138</sup>。Eglogue *Les pasteurs Aluyot et Fresnet* にも「僕の首を両手で抱きしめてほしい、椴の木が葡萄の蔓に堅く巻き付かれるように」という一節がある<sup>139</sup>。Bergerie dédiée à la Majesté de la Roynie d'Escoce では、Elisabeth d'Angleterre と François II の死後に帰国する Marie Stuart とが堅い絆で結ばれていることを示すために葡萄と椴の若木のたとえを使用している。その原型はカトウルスにあるとされているが、ここは先に示したオウィディウスのポモナとウェルトゥムヌス神の話も関連しているのは明らかだろう。このたとえは通常の「葡萄の蔓が椴の若木に絡みつく」という形式とはやや異なり、葡萄の木も椴の木がなければ活力を失ってしまうという形式になっている<sup>140</sup>。1567 年の総合作品集巻 V、第 3 の書にある *Elégie, J'ay ce matin amassé de ma main* では相手の女性のために摘んだ花束が細紐でしっ

137 T9, p. 98, *Chant pastral sur les nocces de Monseigneur Charles Duc de Lorraine, & Madame Claude Fille II. du Roy*, v.437-450 : « Comme une tendre vigne à l'ormeau se marie, / Et de meinte embrassée autour de luy se ploye, / Tout ainsi de ton bras en cent façons plié / Serre le tendre col de ton beau marié » ; p.93, v.349-350 : « Comme un l'hierrre espars pendra ta mariée / A l'entour de ton col estroitement liée » ; var. 84 : « Jamais vigne aux ormeaux si fort ne soit liée / Comme autour de ton col ta jeune mariée », var. 87 : « La vigne à son ormeau si fort ne soit liée, / Qu'alentour de ton col ta jeune mariée ». この部分はカトウルスの一節を参照したとされる。Catulle, *Carmina*, 61, v.34-35 : « Ut tenax hedera huc et huc Arborem implicat errans » ; et 61, v.107-109 : « Lenta qui velut assitas Vitis implicat arbores, Implicabitur in tuum Complexum ».

138 T7, p. 254, v.4-7 : « Voyez deçà delà d'une fretillante aese / Volleter par les boys les amoureux oiseaux, / Voyez la jeune vigne embrasser les ormeaux. / Et toute chose rire en la saison nouvelle : »

139 T12, p.100, *Eglogue Les pasteurs Aluyot et Fresnet*, v.125-126 : « Et presserois mon col de tes bras, en la sorte / Qu'un orme est enlassé d'une vigne bien fortie ».

140 T13, p.119, *Bergerie dédiée à la Majesté de la Roynie d'Escoce*, v.851-854 : « Quand une tendre vigne est pendante aux ormeaux, / En force & en vigueur elle estend ses rameaux / Faict ombrage aux passans, mais si rien ne la serre / Sans force & sans vigueur elle languist à terre : ». Catulle, *Carmina*, 62, v.49-55 : « Ut vidua in nudo vitis quae nascitur arvo, / numquam se extollit, numquam mitem educat uvam, / sed tenerum prono deflectens pondere corpus / iam iam contingit summum radice flagellum; / hanc nulli agricolae, nulli coluere iuveni: / at si forte eademst ulmo coniuncta marita, / multi illam agricolae, multi coluere iuveni: »

かりと結ばれているという描写「Tout le bouquet d'un filet delié / Est bien serré」から話を展開し、葡萄と榦の若木の結びつきはとて強く、死の手さえも打ち破るほどだとして、強い結びつきを強調している<sup>141</sup>。Épigramme Grecでは「私はパラス・アテナの木」と自分をオリーブの木にたとえ、相手を葡萄の木にたとえて、葡萄の蔓がオリーブの木に絡みつく話を使用している。ここでも葡萄はオリーブの木に強く絡みつくものとされて強い結びつきを表現している<sup>142</sup>。

「エレーヌへのソネ」第I巻ソネIでは、エレーヌへの愛を双子の兄弟カストールとポリュックスなど様々なものにかけて贅言のだが、その中に榦の若木に絡みつく葡萄の蔓が登場する。ローマ建国の祖とされる二人も双子という切っても切れない関係にあり、この葡萄と榦の若木も強い結びつきの一つとして使用されている<sup>143</sup>。同じ詩集のソネ XXVII では、葡萄の蔓と榦の若木、さらには恋の季節である春の例をあげて、それも「あなた」がいないならば深い傷とのべ、葡萄の蔓と榦の若木が恋人同士の強い結び付きであることを示している<sup>144</sup>。Chanson, Plus estroit que la Vigne à l'Ormeau se marie でも恋人（女性）に自分を強く抱きしめるように懇願する場面で葡萄と榦の若木が使用されている<sup>145</sup>。Panégirique de la Renommée は Henri III へと捧げられたものだが、「謙遜は人のこころをつかみ、逆に傲慢は怒りをかき立てる」と述べた後で、海辺にそそり立つ岩塊が波とのぶつかり合いをやめぬこと、その一方では、両者の間に横たわる砂は海の激しさを和らげ、自らの客として受け入れることにより、波も激しさを収める例をあげる。そして葡萄と榦の若木の例をあげて、二つの植物は力ではなく愛のみによって絡みつくことで一つになれるのだ、と述べている。文脈としては寛容の重要性に焦点が当たっているが、内容としては強い結びつきのたとえとして葡萄と榦の

141 T14, p.151, *Élégie*, v.53-58 : « [...] j'ay le cœur lié / Au vostre ainsi qu'une vigne se lie / Quand de ses bras aux ormeaux se marie / Lien qui peut, tant il est dur & fort, / Rompre les mains du tombeau de la mort. »

142 T15, p.220, *Épigramme Grec*, v.1-3 : « Je suis la plante de Pallas, / Pourquoi, Vigne, de tant de laqs / Me presse tu le corps si joint ? ».

143 T17, p.194, *Le premier livre des sonets pour Hélène*, sonnet I, v.3 : « Par la vigne enlassée à l'entour des ormeaux ». Laumonier 版では «Souvenir de Virgile, *Géorg.* I, 2 : ulmisque adjungere vites. » となっているが、形式としてはともかくも、文脈の中におかれた意味としては別であろう。

144 T17, p.218, *Le premier livre des sonets pour Hélène*, sonnet XXVII, v.7-8 : « La Vigne mariée à l'entour des Ormeaux, / Et le Printemps sans vous m'est une dure playe. » ここにもウェルギリウスへの送りが付されているが、形式としてはともかくも、文脈の中での意味としては該当しない。

145 T17, p.235, *Chanson*, v.1-4 : « Plus estroit que la Vigne à l'Ormeau se marie / De bras souplement-forts, / Du lien de tes mains, Maistresse, je te prie, / Enlasse moy le corps. »

若木が使用されている<sup>146</sup>。Duc de Joyeuse の結婚に際して 1581 年 9 月に書かれたとされる祝婚歌では、葡萄の蔓と榦の木を使用して歳月と共に絆が深まるたえとしてしている<sup>147</sup>。

*Le voiage de Tours* では、母親に連れられて乗った舟が岸に近づいて、Marion が Perrot を思い出して彼を抱きしめたいと思うのは、近づいた岸に葡萄の蔓に絡みつかれた榦の木を見たためである<sup>148</sup>。*Discours, Donques voici le jour qu'en triomphe* では葡萄と榦の木との結びつきを否定することによって結婚した二人に堅い結びつきが生じないようにと、「榦の木に絡みつかぬ葡萄の株が、子もなく愛もなくその場にしておれるように」と老女に願わせている<sup>149</sup>。この展開は葡萄と榦の木の結びつきが「堅い結びつき」を象徴するという前提がないと意味のないものになってしまうのである。

## 8.2. バッカスとの関連

バッカスは葡萄、葡萄酒と最も関わりの多い神なのでもちろんバッカスとの関連で葡萄が出現する例は多い。まずバッカスは頭を葡萄の蔓で飾っている<sup>150</sup>。バッカスは葡萄酒を発見した神であり、ホメーロスが「飲んだくれ」の異名を得たのもその作品でバッカスの賜物である葡萄を讀えたためである<sup>151</sup>。人間から恋も遊びも踊りも遠ざけることなく、仕事や気苦勞を追いやるのも、「私」の足から力を奪い、地面にひっくり返してしまうのも葡萄（酒）

146 T18, p.9, *Panégirique de la Renommée*, v.183-188 : « La Vigne lentement de ses tendres rameaux / Grimpe s'insinuant aux festes des Ormeaux, / Et se plie à l'entour de l'estrangere escorce / Par amour seulement & non pas par la force / Puis mariez ensemble, & les deux n'estant qu'un / Font à l'herbe voisine un ombrage commun. »

147 T18, p.119, *Épithalame de Monseigneur de Joyeuse, Admiral de France*, v.53-54 : « Mais d'âge en âge croisse autant ferme enlacée, / Que la vigne tient l'orme en ses plis embrassée. »

148 T10, p.224, *Le voiage de Tours ou les Amoureux Thoinet et Perrot*, v.225 : « Où Marion voirra, peut estre, sur le bord / Un orme, des longs bras d'une vigne enlassée, / Et la voyant ainsi doucement embrassée, / De son pauvre Perrot se pourra souvenir, / Et voudra sur le bord embrassé le tenir. » Marion は過去にロンサールが歌った Marie Du Pin, Perrot はロンサール。orme はこの当時は女性名詞だが詩的許容によって不定冠詞は un となっている。

149 T18, p.138, *Discours*, v.195-198 : « Le Myrte tousjours double à Venus dedié, / De ses rameaux Cyprins jamais ce liét n'embrace, / Mais comme un sep de vigne à l'orme non lié, / Sans enfans, sans amour, tombe contre la place. »

150 T2, p.180, *Bocage de 1550*, VIII, *A Gaspar d'Auvergne*, v.47 : « [...] ce Dieu qui environne / Son chef de vigne [...] »

151 T6, p.181, *L'Hinne de Bacus*, v.98-100 : « Un grand bouc qui broutoit la lambrunche sauvage, / Et soudain qu'il eut bien de la vigne brouté / Tu le vis chanceler, come yvre, d'un côté. » ; T8, p.180, *Hymne de L'Or*, v.7-9 : « Mais tout ainsi qu'Homere aquist la renommée / D'yvrongne, pour avoir en ses vers estimée / La Vigne, & de Bacchus les dons délicieux : »

であり、イカリウスの死の原因となったのも葡萄（酒）である<sup>152</sup>。「生前いつも飲んでいた」ラブレールの墓碑銘では「胃と腹から葡萄が生える」のだ<sup>153</sup>。

バッカスの取り巻きの持つ槍を覆っているのは葡萄の蔓であり<sup>154</sup>、酔っぱらって浮かれ騒ぎをすることはバッカスの取り巻きのように身を葡萄の蔓や葉でかざることで表現される<sup>155</sup>。「葡萄を植えた神」、「葡萄の木にその房を与えた者」とはもちろんバッカスのことであり<sup>156</sup>、バッカスはその歩んだ地面に葡萄を生み出す者であり、葡萄の収穫を司る者である<sup>157</sup>。海の老人プロテウスは、イギリスは神々に祝福されており、豊穡の女神ユーノーさえもイギリスを祝福するが、バッカスだけは（ユーノーがイギリスに抱いた恋心に嫉妬して）隣国フランスのように葡萄とその果実を与えてくれないと語る<sup>158</sup>。スズメバチに葡萄を食べることや、収穫後に葡萄の搾汁を飲むことを認めるのもバッカスである<sup>159</sup>。平和がもたらすものはバッカスの贈り物である葡萄の耕作である<sup>160</sup>。テーバイの女たち（ミニュアスの娘たち：バッカスの祭儀を怠った）に彼女たちが織って掛けておいた布がたちまち葡萄に覆われ

- 152 T3, p.200, *Les Bacchantales*, v.289-294, var. 60 : « Vigne, ainçois douce guerriere / Qui derriere / Chasse des hommes bien loing / Non l'Amour doucement veine, / Mais la peine, / Mais le travail & le soing. » ; var. 78-87 : « Vigne, ainçois douce guerriere / Qui derriere / Chasse des hommes bien loing / Non l'amour ny la plaisance, / Ny la dance, / Mais le travail & le soing. » ; p.203, *Les Bacchantales*, v.343-348 : « Et sans une vigne entorse / Qui la force / A soustraite de mes paz, / Et m'a fait prendre bedaine / Sur la plaine / Adenté tout plat à bas. » ; T6, p.17, *Bocage* 1554, IV *D'un vigneron à Bacus*, v.8 : « Les vignes causes de son mal » ; Properce, II, XXXIII, 29 : « Icare, Cecropiis merito jugulate colonis ».
- 153 T6, p.21, *Épître de François Rabelais*, v.5-8 : « Une vigne prendra naissance / De l'estomac et de la pance / Du bon Rabelais, qui boivoit / Tousjours ce pendant qu'il vivoit. »
- 154 T6, p.182, *L'Hinne de Bacus*, v.132-133 : « [...] / Un dart, qu'un cep de vigne alentour tapissoit. / Que tu prenois, Bacus, en ton cœur de liesse, / [...] »
- 155 T3, p.198, *Les Bacchantales*, v.247-249 : « Advienne qu'orné de vigne / Je trepigne / Tousjours villant Étié ».
- 156 T3, p.200, *Les bacchantales*, v.283-286 : « Mais bien c'est moy qui te loü, / Et t'avoué / Pour un Dieu, d'avoyr planté / L'heureuse vigne feconde, » ; var. 78-87 : « La vigne en raisins feconde » ; T5, p.74, *Dithyrambes*, v.340-341 : « Tu es à la vigne donneur / De sa grappe »
- 157 T6, p.185, *L'Hinne de Bacus*, v.173-176 : « Mais, Pere, tout soudain que la terre nouvelle / Sentit tes pieds divins qui marchaient dessus elle, / (Miracle) tout soudain fertile, elle produit / La vigne herissée en feuilles & en fruit » ; T6, p.16, *D'un Vigneron à Bacus*, v.1-4 : « Ecoute anfançon de Silène, / Bacus, si tu veus charger pleine / Ma jeune vigne de raisins / Plus que celles de mes voisins »
- 158 T13, p.51, *Élégie à la Majesté de la royne d'Angleterre*, v.276 : « Un seul Bachus hélas ! pour l'amour d'elle / Te hayra, & comme à tes voisins / Ne te don'ra ny vignes ny raisins. » 1564 年 4 月のトロワの和約の際に書かれたとされる。
- 159 T6, p.91, *Le freslon*, v.53-60 : « Lors Bacus, en lieu du bien-fait / Que les freslons lui avoient fait, / Leur ordonna pour recompence / D'avoir à tout jamais puissance / Sur les vignes, & de manger / Les raisins, pres à vandanger, Et boire du moust dans la tonne Impuniment, [...] »
- 160 T9, p.25, *Exhortation pour la Paix*, v.203-205 : « La paix sur les coutaux tira droit à la ligne / Les ordres arengez de la premiere vigne : / De raisins empamprez Bacche elle environna »



るのを見せるのもパッカスなのである<sup>161</sup>。

### 8.3. 榮華, 榮光

*Au cendres de Marguerite de Valois* では、「咲き誇る花は野の蔭れ、小川は野の蔭れ」と述べ、続いて「椈の蔭れは愛しい葡萄の蔓」であり、同様に Marguerite de Valois は王妃たちの蔭れであるという展開へと続けており、ここでは葡萄は名誉あるものとして使用されている<sup>162</sup>。*Bergerie dédiée à la Majesté de la Royne d'Escoce* でも同じような展開が現れる。ここでは「葡萄の木が椈の木の蔭れであるように」の後に「新しい房が葡萄の木の蔭れであるように、群れを率いる雄ヤギが群れの蔭れであるように、穂が野の蔭れであるように、熟れた果実が果樹園の蔭れであるように、同じようにアンリオは羊飼いの蔭れ」と続いていることから、先にあげた *Au cendres de Marguerite de Valois* と同様に名誉あるものの代名詞として使用されている<sup>163</sup>。

### 8.4. 自然描写, その他

まず、*Hymne de l'Or* では、黄金の時代ではない今の世にあっては、葡萄は金をかけて植えなければならないものなのである<sup>164</sup>。そして *Les louanges de Vandomois* ではロンサールの故郷であるヴァンドーモワの地は優れた葡萄と葡萄酒を産することが誇りとされている<sup>165</sup>。*Contre les avaricieux* では、ささやかな財産で満足して暮らす人間は葡萄が天候の被害を受けはしまいかという心配で目を覚ましつけないものなのだとされ<sup>166</sup>、*Hymne des Astres* では、ある者が葡萄栽培者となり、葡萄を植えることを生業とすることになるのも星の定めによるのだという<sup>167</sup>。*Chant pastoral Les Pasteurs, Bellot, Perot, Michau* で牧人の Bellot (=Du Ballay) と Perot (=Ronsard) が Meudon の洞窟へ至るのは丘の斜面の葡萄畑の小道を通っ

161 T5, p.71, *Dithyrambes*, v.297-299 : « Que diray-je de ces Thebaines, / Qui veirent leurs toiles pleines / De vigne, [...] » ミニュアスの娘たちについては Ovide, *Métamorphoses*, IV, v.389-415.

162 T.3, p.79, *Au cendres de Marguerite de Valois*, v.7-10 : « Comme les herbes fleuries / Sont les honneurs des prairies, / Et des prés les ruisselets, / De l'orme la vigne aymée ».

163 T13, p.98, *Bergerie dédiée à la Majesté de la Royne d'Escoce*, v.437-438 : « [...] la vigne est l'honneur d'un ormeau, / Et l'honneur de la vigne est le raisin nouveau ».

164 T8, p.188, *Hymne de l'Or*, v.179-180 : « Il faut planter, enter, prouvigner à la ligne / Sur le sommet des montz la dispenseuse vigne ».

165 T1, p.222, ode XVII *Les louanges de Vandomois*, v.18-20 : « Et sur l'autre prend vie / Maint beau sep, dont le vin Porte bien peu d'envie / Au vignoble Angevin ».

166 T1, p.185, ode IV *Contre les avaricieux*, v.34 : « la vigne atteinte ».

167 T8, p.155, *Hymne des Astres*, v.120-121 : « L'autre est né vigneron, & d'une droite ligne / Dessus les montz pierreux plante la noble vigne ».

てであり<sup>166</sup>、窓から外を見渡す人の目に写る風景の描写から入る *Elégie à Loïs des Masures Tournisien* では、その視線の先に広がる風景の中にはもちろん葡萄畑もある<sup>168</sup>。海のニンフであるガラテアに恋をしたキュクロプスのポリュペーモスの果樹園には葡萄の木も含まれている<sup>170</sup>。 *Eclogue du Thier Les pasteurs* : Bellot, Perrot, Bellin で牧人の Bellot(=Du Ballay) と Perot(=Ronsard) が Bellin(=Belleau) を誘う洞穴の入り口には房の重さに耐えかねて垂れ下がる葡萄の蔦がある<sup>171</sup>。 *Hymne du Printemps* では美しいニンフの Flore に夢中になって憔悴していた「春」が西風 Zephyre から Flore を受け取ったとたんに世界はその様相を変える。野は緑となり、葡萄の木は実をつけるのである<sup>172</sup>。 *Eglogue Daphnis et Thyrsis* で Lansac が Daphnis と Thyrsis の二人を招く場所では椈の若木に絡みつく葡萄の蔓があり、Orléantin が他の牧人たちを招く描写でも椈の若木に絡みつく葡萄の蔓があるが、ここには「抱擁」や「堅い結びつき」の意味は無く、心地よい場所の描写の一つとして使用されている<sup>173</sup>。

*La Franciade* では、命は金では買えず、墓に入った後では、地界で葡萄を育てたり畠を耕したり、四季の賜物が家を満たすと思っているなら、それは間違いだとされている<sup>174</sup>。 *A Monsieur D'Angoulesme* では葡萄を知らぬ人々の征服が Henri III の武勲としてあげられ<sup>175</sup>、

168 T9, p.76, *Chant pastoral Les Pasteurs*, Bellot, Perrot, Michau, v.12-13 : - Au travers d'une vigne, en une sente estroite, / Gagnerent pas à pas la Grotte de Meudon -

169 T10, p.362, *Elégie à Loïs des Masures Tournisien*, v.4-7 : « Icy une rivière, un rocher, un buisson [...] Un verger, une vigne, un jardin bien dressé ».

170 T10, p.287, *Le Cyclope amoureux*, v.226-227 : « [...] j'ay des vignes / Dont le joyeux raisin, en la saison choisy ».

171 T10, p.52, *Eclogue du Thier Les pasteurs* : Bellot, Perrot, Bellin, v.41-44 : « Une vigne sauvage est rampant sur la porte / Qui, en se recourbant, sur le ventre se porte, / D'une longue trainée, & du hault jusqu'en bas / Mal chargez de raisins laisse pendre ses bras. » ; note 2 : « Imité de Virgile, *Buc.* V, vers 6 et suiv. »

172 T12, p.30, *Hymne du Printemps*, v.41-43 : « Alors d'un nouveau chef les bois furent convers, / Les prés furent vestus d'habillemens tous verts, / Les vignes de raisins : [...] »

173 T12, p.153, *Eglogue Daphnis et Thyrsis*, v.117-118 : « Or sus assisés vous, icy l'herbe est fleurie, / Icy la vigne tendre aux ormeaux se marie ». Daphnis は Charles IX, Thyrsis は Alexandre-Edouard (後の Henri III) 。Lansac は Louis de Saint Gelais, seigneur de Lansac, 雄弁と外交手腕に長けた人物でカトリクス・ド・メディシス (Charles IX と Henri III の母) の腹心であり顧問。T13, p.81, *Bergerie dédiée à la Majesté de la Roynne d'Escosse*, v.92 : « Icy la tendre vigne aux ormeaux se marie ». Orléantin は「[?]時の Duc d'Orléans (後の Henri III) である。Laumonier 版の note 2 には « Souvenir des poètes latins, entre autres Virgile, *Georg.*, 1, 2: Ulmis adjungere vites » とあるが、すでに述べたように、ウェルギリウスの原著では農業的視点からの描写である。[牧歌 / 農耕詩]。小川正廣訳、京都大学学術出版界には、椈の木は葡萄の支柱である旨の注がある。

174 T16, p.226, *La Franciade*, v.1153-1161 : « Si tu pensois quand la tombe nous serre / Qu'on cultivast les vignes souz la terre, / [...] / Tu es trompée [...] ».

175 T7, p.72, ode V, *A Monsieur D'Angoulesme*, v.153-154 : « Et ceus qui ne coupent le fruit / Des vignes meures devenues » Monsieur d'Angoulesme は後の Henri III. Laumonier は別の考えを述べているが、ここは T6, p.17, *Bocage* 1554, IV, *D'un vigneron à Bacus*, v.8 にも見られるように、Properce, II, XXXIII, 29 : « Icare, Cecropiis merito jugulate colonis » にあるアッティカの人々を意味するとも考えられる。

Charles IX のもとでは葡萄の木は鎌を恐れることなく実をたわわに実らせる<sup>176</sup>。また、新教徒からの中傷への反論では、教会の腐敗の中、荒れ果ててしまったものの一つは葡萄畑である<sup>177</sup>。

「私」は、カッサンドラに抱かれた子犬をうらやむとき、葡萄を耕し芝を刈る人のようになりたいと願う<sup>178</sup>。「私」が好むのは、スマイルよりも赤いカーネーションよりもヒヤシンスよりもひまわりよりもヘレニウムよりもアルムの花よりも葡萄の花であり、神々が転身させてくれるならば、死に際しては葡萄の花になりたいと願うのである<sup>179</sup>。また、詩人である「私」がアポロンに願うのは収穫でもなく、金でもなく、象牙でもなく、ロワール Le Loir の潤す土地でもなく、けげげしい身なりでもなく、しかしいくつかある願いの一つは、土地の葡萄が王の気に入ることである<sup>180</sup>。「私」は「冬」に向かって友人の葡萄畑に損害を与えないようにと願う<sup>181</sup>。「私」は詩作よりも夜も昼も葡萄の木の世話に幸せを見だし、庭や畠で他の植物を育てるよりも葡萄の栽培を好むのである<sup>182</sup>。「私」はヘーラクレースがテイオダマース王にしたとされる仕打ちは信じられないと言う。ヘーラクレースによって殺されたとされる王はヘーラクレースによって以前よりも良い人間になり、葡萄畑を耕す苦勞で死んだのだという<sup>183</sup>。

Daphnis と Thyrsis の歌比べでは、Daphnis は 2 頭の子羊と 2 頭の肥えた子ヤギを賭け、Thyrsis は杯を一つ賭けるが、その杯には実をつけ垂れ下がる葡萄と収穫し果汁を搾る乙女

176 T13, p.109, *Bergerie dédiée à la Majesté de la Roynie d'Escosse*, v.667-670 : « Les vignes n'auront peur de senir les faucilles, / De leur gré les sommetz des arbres bien fertiles / Noirciront de raisins, & le clair ruisseau / Ondoira par les fleurs & de vin & de lait : » Guisin は Henri de Guise.

177 T11, p.139, *Responce de P. de Ronsard, gentilhomme vandomois, aux injures & calomnies de je ne scay quels Predicans & Ministres de Geneve*, v.443-444 : « Je scay que des Abbés la cuisine trop riche / A laissé du Seigneur tomber la vigne en friche ».

178 T7, p.156, *Continuation des Amours, sonnet XXXIX*, v.9-11 : « Mon Dieu, que n'ai-je au chef l'entendement / Aussi plombé qu'un qui journelement / Béche à la vigne, ou fagotte au bocage ! »

179 10, p.132, *Ode de la fleur de la vigne*, v.33-36 : « Ne me plaisent tant, que la fleur / De la douce vigne sacrée, / Qui de sa nectareuse odeur / Le nez & le cœur me recrée. » ; p.132, v.37-40 : « Quand la mort me voudra tuer / (A tout le moins si je suis digne / Que les Dieux me daignent muer) / Je le veux estre en fleur de vigne. »

180 T10, p.137, *Ode à Gaspard d'Auvergne*, v.40 : « A qui la vigne succede »

181 12, p.85, *Hymne de L'Hyver à Monsieur Bourdin*, v.391-393 : « Je te salue, Hyver, le bon fils de Nature / Chasse de mon Bourdin toute estrange aventure, / Ne gaste point ses champs, ses vignes ny ses blés ».

182 T15, p.17, *A Monsieur de Belot*, v.35-38 : « Je ne faisois alaigne de séjour, / Fust au coucher, fust au lever du jour, / Qu'enter, planter, & tirer à la ligne / Le cep tortu de la joyeuse vigne » ; p.18, v.48-50 : « Je l' [= Baccus] honorois d'artifice soigneux, / Ne cultivant, ou fust jardin ou prée, / Devant le cep de la vigne sacrée. »

183 T15, p.238, *Hylas au seigneur Passerat*, v.81-86 : « Voila pourquoy la tourbe estant trompée / Disoit qu'aux bœufs la gorge avois coupée, / Tué leur Roy, que tu rendis meilleur / Qu'au paravant, travaillant laboureur, / S'emmeigrissant & tuant souz la peignée / De cultiver ses vignes & sa pleine. »

たちが描かれていた<sup>184</sup>。

以上がロンサルにおける葡萄の使い方であるが、葡萄と恋（愛）との関連はあるが、ここでもやはり「恋のメッセージ」との関連は見いだせなかった。

#### 9. まとめ クーマエの巫女と木蔭のつながりについて

これまで、ロンサルの作品中における木蔭 *lierre* の使われ方について、『新続恋愛詩集』からはソネ *Au Roy*, 『続恋愛詩集』からは XXXVII, LVIII, LIX, と合計4つのソネを取り上げ、出発点として検討した。まず、『新続恋愛詩集』の *Au Roy* の用例では木蔭は詩のジャンル（内容）を示すという役割を与えられていたが、これは詩編内の文脈から読みとることができた。次に、『続恋愛詩集』のソネ3つにおいては、どの用例でも、文脈中での役割ははっきりとしていた。木蔭は「愛の告白を木蔭（の葉）に書いて伝える」という展開の中で使用されてメッセージを伝える媒体の役割を与えられていた。そして、恋のメッセージを伝える木蔭の現れる描写の部分についてはウェルギリウス (*En.* III, 441 et suiv. ; VI, 72 et suiv.), オウィディウス (*Fastes*, III, 459 à 516; *Mét.*, VIII, 174 et suiv.), カトウルス (*Epitahl. de Pélée*, 120 à 268) のへの送りが与えられていた。だが、実際に古典作品を調べてみると、内容的には「木蔭に恋の告白を書く」という展開とは関係のないものであったことが明らかになった。つまり、クーマエの巫女のエピソード、バックスと木蔭のエピソード、バックスとアリアドネーのエピソードは、それぞれ上記の3つのソネとの関連は確かにあるが、ロンサルの「木蔭に愛の告白を書く」という展開の説明にはなっていなかった。さらにクーマエの巫女が予言を書く葉の樹木に関して調べてみると、それは木蔭ではなくむしろ棕櫚の葉であったのである。

そこで、オウィディウス、カトウルス、ウェルギリウスというロンサルが頻繁に参照を行っている古典作家における木蔭の使用例を検討したが、木蔭（の葉）に愛のメッセージを書くという用例は見いだせなかった。さらに、いわゆる古代の巫女全般、ロンサルにおける巫女についても検討したが、木蔭の葉に予言を書くという話は古代でもロンサルでも他にはないようである。ロンサルにおける木蔭の使い方でも、木蔭の葉にメッセージを書くという行為は最初に取り上げたソネ3編にしかでてこないものであった。また、オウィディウスには木蔭と同様に恋愛と関連して使用される葡萄の木の用例があったため、ロンサル

184 T12, p.148, *Eglogue. Daphnis et Thyrsis*, v.29-40 : - En lieu de tes aigheaux je veux mettre une tace / Qui quatre fois le prix de ton gage surpasse. / Nouvellement tournée, encores elle sent / La cyre & le burin. Une vigne descent / Tout à l'entour des bords, qui, de raisins chargée, / Est de quatre ou de cinq pucelles vandangée : / L'une tient un panier, l'autre tient un cousteau, / Et l'autre de ses pieds presse le vin nouveau. / Qui semble s'écouler dans la tace profonde. / A l'ombre de la vigne est une Nympe blonde / A cheveux deliés, qui se couvre le flanc / Et le corps seulement d'un petit linge blanc. • Daphnis は Charles IX, Thyrsis は後の Henri III.

における葡萄の使い方も検討した。ロンサルでも葡萄は木蔦と同様な使い方をされているのだが、やはり、葡萄の葉にメッセージを書くという用例はなかった。

さまざまな用例の検討の結果、得られた重要な関係は、「クーマエの巫女は木の葉にメッセージを書く」、「木蔦は恋愛と関係がある」、「葡萄は恋愛と関係がある」、「バックスは木蔦、葡萄の神として恋愛と関係がある」という関係である<sup>185</sup>。これらの関係のうち、問題にしたソネの「木蔦（の葉）に恋のメッセージを書く」という展開に最低限必要なのは「クーマエの巫女は木の葉にメッセージを書く」、「木蔦は恋愛と関係がある」である。しかし両者は直接にはつながらない。両者を結びつけるもう一つの環がミッシングリンクとなっているのだ。

ところで、「木蔦の葉に恋のメッセージを書く」という展開を持つ3つのソネ（XXXVII, LVIII, LIX）はすべて1555年の『続恋愛詩集』に収録されている。1552年に出版された『恋愛詩集』ではロンサルはカッサンドラを歌ったが、『続恋愛詩集』ではカッサンドラに代わって新しい女性マリーが歌われている<sup>186</sup>。しかしながら1555年後半に出版されたとされる『続恋愛詩集』にも、ロンサルがマリーに出会う以前、あるいはロンサルの心の中でマリーがカッサンドラにとってかわる以前に書かれたとされる詩編がいくつも含まれている。

たとえばソネ VII-XII, XL, LXIII, LXX ではマリーの名前が明示されている<sup>187</sup>。XVII では Belleau の注に基づいてマリーを歌っていると推測され<sup>188</sup>、XX ではソネ VIII で示された姉の存在によりマリーが対象だと推測されている<sup>189</sup>。XI はカッサンドラか、もしくはロンサルがパリで出会った方のマリーだと推測され<sup>190</sup>、LIII は詩編の内容 - *depuis quinze mois* - からマリーを念頭において書かれたと推測されている<sup>191</sup>。

ソネ XXXIX, LVI, LXV ではカッサンドラの名前が明示されている。XVIII は詩の内容からカッサンドラを念頭において書かれたとされ<sup>192</sup>、XXXIII は詩句 - *Desja neuf ans evanouiz se sont* - によってカッサンドラに帰せられる<sup>193</sup>。XXXIV は1578年の『総作品集』でカッサ

185 すでにみたように、他にも様々な使用例があったが、ここでは「木蔦」と「恋のメッセージを書く」ことがどうつながるかというテーマにとって重要なものに限っておく。

186 マリーとロンサルの出会いの日は、1554年春という説もあるが、Laumonier は1555年4月20日であろうと推測している。T7, Introduction XII, « [...] j'adopt, dans la mesure où l'on peut faire fond sur les données chronologiques des poètes, la date du 20 avril 1555. »

187 XL では二人のマリーが登場するが、これについてはBelleauが、ロンサルがパリに出てきた際に出会った同じマリーという名の女性に言及している。

188 T7, p.134, note 3 et note 4.

189 T7, p.138, note 1: « D'après le sonnet VIII ci-dessus, il s'agit de Marie et des ses deux sœurs aînées. »

190 T7, p.158, note 2: « Il s'agit donc ou bien de Cassandre encore, ou bien de Marie la parisienne [...] ».

191 T7, p.170, note 1: « Il s'agit vraisemblablement de Marie, [...] ».

192 T7, p.135, note 2: « Ce début montre assez qu'il s'agit de Cassandre Salviati, qui habitait le Vendomois depuis son mariage avec Jean Peigné, seigneur de Pray. - Sonnet XVIII, v.1-2: « Bien que vous surpassiés en grace & en richesse / Celles de ce país, & de tout autre part ».

193 T17, p.150, note 1: « Ce vers prouve que ce sonnet fut écrit pour Cassandre ».

ンドラへ捧げられた *Premier livre des Amours* へ収録されたことからカッサンドラを歌ったとされ、XXXVI は「En soupirant pour elle mainte année」の詩句によってカッサンドラを対象としているとされる<sup>194</sup>。LXIX はソネ自体にカッサンドラの名前はでていないが、ドラによるラテン語訳が次に位置しており、そこではカッサンドラ「nostra Cassandra」と明示されていることから、カッサンドラを念頭において書かれたとされる<sup>195</sup>。

本稿で問題にしているソネの一つである XXXVII は、「Il s'agit sans doute de Marie.」という注がついているが、具体的な理由は示されておらず、注の後にはソネ LVIII と LIX への送りが続いているだけである<sup>196</sup>。そしてこのソネは 1557 年の版では削除されて無くなってしまった。したがって総合作品集でカッサンドラへ捧げられた *Premier livre des Amours* か、あるいは、マリーへ捧げられた *Scnd livre des Amours* のどちらの詩集に分類されたかという情報は存在しない。一方ソネ LVIII と LIX は総合作品集ではマリーへ捧げられた *Scnd livre des Amours* へ収録されている。おそらく Laumonier 版ではソネ LVIII と LIX との内容的な類似からひとまとめに考え、XXXVIII はマリーを歌った詩編としたようである<sup>197</sup>。しかし先にあげた XXXIII は詩句「neuf ans」を「sept ans」へと変更して 1560 年の総合作品集では *Seconde livre des Amours*、つまりマリーへ捧げられた巻へ収録された。LXIX は 1560 年～1572 年の総合作品集ではマリーへ捧げられた *Second livre des Amours* へ収録されていたが、その後はカッサンドラへ捧げられた *Premier livre des Amours* へ収録されている。したがって、総合作品集での分類先による判定は、両方を行ったり来たりする詩編の例があることにより、絶対とは言い切れない部分があることがわかる。

『続恋愛詩集』XXXVII で与えられたメッセージは「pour adieu sa main [...] me fait present」なのであり、「pour adieu」はロンサールの作品内では、「Baise moy pour adieu avant que t'en aller」、*« [...] Adonis, tu t'en vois ! / Pour le dernier adieu baise moy, je te prie : / Autant que ton baiser encores a de vie / Baise moy pour adieu : [...] »* のように使用されている<sup>198</sup>。また、この詩編には 5 月「Le mois de Mai」という言葉が入っているが、これをロンサー

194 T7, p.154, note 1 : « D'après ce vers, ce sonnet ne peut s'appliquer qu'à Cassandre. »

195 T7, p.187, note 1 : « Dorat a rendu m'amie par nostra Cassandra. Il s'agit donc de Cassandre Salviati, si ce n'est pas de la pure littérature. »

196 T7, p.155, note 1 : « Il s'agit sans doute de Marie. A rapprocher les sonnets LVIII et LIX ci-après. »

197 Pléiade 版では LVIII に注が与えられている。Ed Pléiade, I, p.1338, note 4 : « L'écriture de Marie, avec son « espingle poignante », s'apparente à un geste magique. » しかしこの注でも、なぜマリーなのかという点ははっきりしない。

198 T12, p.120, *L'Adnis*, v.228 ; p.125, v.336-339. 他には T7, p.67, *A Monsieur D'Angoulesme*, v.20, var.78-87. ここでは当初は「Pour l'adieu」だったが「Pour adieu」へと変わった。文脈としては当初は Polymnie (讃歌を司る詩神) の lyre を使おうとしたが、王の命令で Bellone (ローマの戦の女神) のトランペットに楽器を替えることになった。ついでには新しい楽器を試す前に最後にまだこのオードのために lyre を使わせてくれ、という話である。

ルがマリーと出会った後の5月だとすれば、1555年5月と考えることになる。すると、出会って1ヶ月余りですでに振られたという話になるのではなからうか<sup>199</sup>。

ここからは仮説だが、もし、これらの3つの詩の発想の源にカッサンドラがいるとしたらどうだろうか。1552年の『恋愛詩集』でロンサールのミューズの役割を果たしたカッサンドラ *Cassandre Salviati* は、もちろん最初の出会いでロンサールの心を虜にしたわけだが<sup>200</sup>、このカッサンドラには、トロイア王プリアモスの娘でアポロンから予言の力を得たデルボイの巫女のカッサンドラと名前が同じだという「魅力」があった。トロイアのカッサンドラはアポロンに言い寄られ、予言の力を与えられる代わりに身をまかせる約束をする。ところが予言の力を得ると彼女はアポロンを拒んだ。一度与えられた予言の力を奪うことはできなかったため、アポロンはカッサンドラの言葉を誰も信じないようにしたという。ちなみにクーマエの巫女もアポロンに仕えるデルボイの巫女なのである。

1552年の『恋愛詩集』では、ソネ IV, XIX, XXXVI, LXXIX, XC, CLXXVI の6編で恋人カッサンドラと巫女カッサンドラが重ね合わされている。とりわけ XIX では恋人カッサンドラが巫女カッサンドラのように予言を述べている。内容的には「私（ロンサール）」にとってはなほ厳しい予言である。巫女カッサンドラの場合であれば、この予言は必ず当たるが誰にも信じられないこととなるが、恋人カッサンドラが語るこのソネの場合は、空に稲妻が右から走る（古代ローマでの不吉な印）によって、予言が確定し実現することを「私」が信じざるを得なくなる展開となっている<sup>201</sup>。

仮に「恋人が木鷲に恋のメッセージを書く」という展開の発想の背後に、トロイアの予言者にしてデルボイの巫女であるカッサンドラと重ね合わされたカッサンドラを想定すると、預言者である恋人が相手の恋の運命を定める言葉を恋愛と密接な関係を持つ木鷲の葉に書く

199 『続恋愛詩集』は1555年7月から9月の間とされている（T7, Introduction XIX-XX）。ロンサールとマリーの出会いを1554年春とする説もあり、こちらを採用すれば、やはり1ヶ月余りで振られたか、1年1ヶ月程度のつき合いの後に振られた話になる。

200 ロンサールがカッサンドラと出会ったのも、年は異なるが、やはりマリーと同じ4月であり、1546年4月21日であったろうとされている。T4, Introduction VII, - D'après maints documents, dus la plupart à lui-même, Ronsard avait vingt ans quand il rencontra Cassandre Salviati, à Blois, dans un bal de la Cour, le 21 avril 1546. - カッサンドラが結婚するのは1546年11月下旬である。P. Laumonier, Ronsard poète lyrique, p.43, note 2 : - On le sait par une pièce des Archives dép. du Loir-et-Cher, qui mentionne une donation faite le 23 nov. 1546 - en faveur de mariage - par Jean Peigné à Cassandre Salviati [...]. -

201 このソネでの予言は口頭で述べられている。T4, p.22, sonnet XIX : - Avant le temps tes temples fleuriront, / De peu de jours ta fin sera bornée, / Avant ton soir se clorra ta journée, / Trahis d'espoir tes penses périront. / Sans me fleschir tes escriptz flétriront, / En ton desastre ira ma destinée, / Ta mort sera pour m'amour terminée, / De tes soupis tes neveux se riront. / Tu seras faict d'un vulgaire la fable, / Tu bastiras sur l'incertain du sable, / Et vainement tu peindras dans les cieulx : / Ainsi disoit la Nymphé qui m'afolle, / Lors que le ciel pour scéeller sa parole / D'un dextre éclair fut presage à mes yeulx. -

のは、すっきりとした流れとして理解されるのである<sup>202</sup>。

これらの3つのソネはたしかにマリーへ捧げられたものではあったのだろう。しかしその背後にある発想はカッサンドラなくしては生まれなかったように思われるのである。

最後に本稿を執筆する過程で、Laumonier 版と Pléiade 版の注に関して、気が付いた点を箇条書きにまとめておく。

1. T7, p.175, sonnet LVIII, v.13, « amour est fin », voir Clément Marot, *L'adolescence clémentine, Troisième Éloge en forme d'Épître, Quand j'entrepris t'essayer*, v.65 : « Amour est fin, et sa parole farde ».
2. T7, p.177, la note 1 de l'éd. Laumonier renvoie aux deux passages de Virgile et d'Ovide qui ne donnent pourtant aucun renseignement sur la feuille de lierre utilisée pour transmettre un message d'amour.
3. T7, p.175, sonnet LVIII, v.9, sur la Sibylle de Cumée voir aussi Ovide, *Métamorphoses*, XIV, v.106-113.
4. T17, p.74, v.212-219, voir Catulle, *Carmina*, 61, v.34-35.
5. T12, p.157, v.177-180, voir Virgile, *Bucoliques*, VII, v.25.
6. T12, p.63, v.381-385, voir Ovide, *Métamorphoses*, VIII, 172-177 ; Ovide, *Fastes*, III, v.481 ; Catullus, *Carmina*, LXIV, 251-253.
7. T6, p.79-80, v.123-126 ; t13, p.81, v.92 ; t17, p.194, v.3 ; t17, p.218, v.7-8, ces trois passages sont munis de renvois au Virgile, *Géorg.* I, 2 : « Ulmis adjungere vites » dont le contenu est purement agricole.

#### テキストおよび参考文献

1. *Catullus/Tibullus/Pervigilium Veneris*, 2nd ed., translated by Francis Warre Cornish/ translated by J.P. Postgate/translated by J.W. Mackail. Harvard University Press/ W. Heinemann, 1988. The Loeb classical library.
2. Catulle, *Poésies*, Texte établi et traduit par Georges Lafaye, revu par Simone Viarre et Jean-Pierre Néraudau, Les Belles Lettres, Classiques en poche, 2006.

202 1552年の『恋愛詩集』を書き上げる以前にロンサルがこの「木馬（の策）に恋のメッセージを恋人が書く」という展開を得ていたら、おそらくそれを『恋愛詩集』に入れずにはおかなかったのではないだろうか。同様な展開をする3つのソネが全て『続恋愛詩集』に収録されているのは、ある意味ではこの「発想」を得た時期についても示唆を与えているように思われるのである。



3. Creore, A.E., *A word-Index to the poetic works of Ronsard*, 2 vol., W.S. Maney and son LTD., Leeds England, 1972.
4. Du Bellay, *Œuvres poétiques*, éd. Chamard, t.1-6, Librairie Nizet, 1931-1987.
5. Horace, *Odes et épodes*, texte établi et traduit par F. Villeneuve, J. Hellegouarc'h, Les Belles Lettres, 1991.
6. Juvénal, *Satires*, Texte établi par Pierre de Labriolle et François Villeneuve éméché, présenté et traduit par Olivier Sers, Les Belles Lettres, Classiques en poche, 2005.
7. Marie de France, *Lais de Marie de France*, Livre de Poche, 1990.
8. Norma Lorre Goodrich, *Priestesses*, Harper Perennial, 1990.
9. Ovide, *Les Métamorphoses*, texte établi et traduit par Georges Lafaye, sixième tirage, 3 vol., Les Belles Lettres, 1980.
10. Ovide, *L'art d'aimer*, texte établi et traduit par Henri Bornecque, septième tirage, Les Belles Lettres, 1983.
11. Ovide, *Les amours*, texte établi et traduit par Henri Bornecque, Les Belles Lettres, 1930.
12. Ovide, *Fasti*, translated by Sir James George Frazer, 2d edition revised by G. P. Goold, Harvard University Press, The loeb classical library.
13. Paul Laumonier, *Ronsard poète lyrique*, Siatkine Reprints, 1972, éd. princeps Hachette, 1932.
14. Propertius, *Élégies*, Texte établi, traduit et commenté par Simone Viarre, Les Belles Lettres, 2005.
15. Ronsard, *Œuvres Complètes de Ronsard*, éd. Laumonier, S.T.F.M., Librairie NIZET, 1937-1990.
16. Virgile, *Énéide (Aeneis)*, texte établi et traduit par Jacques Perret, troisième tirage, 3 vol., Les Belles Lettres, 1992.
17. Virgile, *Géorgiques*, texte établi et traduit par Paul Mazon, septième tirage, Les Belles Lettres, 1982.
18. Virgile, *Bucolique*, texte établi et traduit par E. de Sant-Denis, quatrième tirage, Les Belles Lettres, 1983.
19. ウェルギリウス、『アエネーイス』、泉井久之助訳、岩波文庫、第3刷、1991。
20. ウェルギリウス、『ウェルギリウス 牧歌・農耕詩』、河津千代訳、未来社、初版、1981。
21. ウェルギリウス、『ウェルギリウス 牧歌・農耕詩』、小川正廣訳、京都大学学術出版会、2004。

22. オウィディウス、『祭暦』、高橋宏幸 訳、叢書アレクサンドリア図書館、第一巻、国文社、初版 1994。
23. オウィディウス、『変身物語』、中村善也訳、岩波文庫、1984。
24. オウィディウス、『転身物語』、田中秀央、前田敬作訳、人文書院、1979。
25. カトゥルルス、ティブルルス、プロペルティウス、オウィディウス他、『ローマ恋愛詩人集』、中山恒夫編訳、アウロラ叢書、国文社、1985。
26. ホメーロス、『オデュッセイアー』、呉茂一訳、岩波文庫、1979。
27. ホラティウス、『歌章』、藤井昇訳、現代思潮社、1973。
28. ユウェナーリス、『サトゥラエ 諷刺詩』、藤井昇訳、日中出版、1995。
29. ロンサル、『ロンサル詩集』、高田勇訳、青土社、1985。

## Lierre chez P. de Ronsard

### - Sibylle de Cumée et message d'amour -

Yoshito EMMI

Les sonnets LVIII, LIX et XXXVII de la *Continuation des Amours* présentent une tournure littéraire dans laquelle la feuille de lierre est utilisée pour transmettre un message d'amour d'une maîtresse à son amant. Cette tournure est caractérisée par les mots *lierre*, *vigne*, *Cumée*, *Sibylle*. Elle apparaît d'abord chez des poètes romains, ensuite aux poètes italiens et néo-latins, et enfin aux poètes du XVI<sup>e</sup> siècle dont Ronsard.

L'édition Laumonier et l'édition Pléiade donnent pour références à cette tournure des passages de Virgile, de Catulle et d'Ovide, et on y retrouve les descriptions de la Sibylle de Cumée et de la rencontre de Bacchus et d'Ariane. Mais ces passages ne procurent en fait aucun renseignement sur la feuille de lierre utilisée pour y écrire un message d'amour. En étudiant d'autres exemples trouvés dans les œuvres de ces trois poètes romains, nous n'avons malheureusement pas découvert d'exemples qui se rapportent directement aux trois exemples de Ronsard. Autrement dit, nous n'avons pas trouvé d'expressions qui aient inspiré à Ronsard cette tournure de lierre.

Mais il nous semble possible de faire une hypothèse sur son origine en tenant compte du recueil de la *Continuation*. Celui-ci contient des sonnets dédiés à Marie ainsi qu'à Cassandre dont le nom provient de la Sibylle troyenne Cassandra. Cet accord entre Cassandre française et Cassandra troyenne peut être à l'origine de la tournure.

Voici pour finir des notes supplémentaires aux deux éditions très reconnues.

1. T7, p.175, sonnet LVIII, v.13, « amour est fin », voir Clément Marot, *L'adolescence clémentine, Troisième Éloge en forme d'Épître, Quand j'entrepris l'écriture*, v.65 : « Amour est fin, et sa parole farde ».
2. T7, p.177, la note 1 de l'éd. Laumonier renvoie aux deux passages de Virgile et d'Ovide mais ils ne donnent pourtant aucun renseignement sur la feuille de lierre utilisée pour transmettre un message d'amour.
3. T7, p.175, sonnet LVIII, v.9, sur la Sibylle de Cumée voir aussi Ovide, *Métamor-*

*phoses*, XIV, v.106-113.

4. T17, p.74, v.212-219, voir Catulle, *Carmina*, 61, v.34-35.
5. T12, p.157, v.177-180, voir Virgile, *Bucoliques*, VII,v.25.
6. T12, p.63, v.381-385. voir Ovide, *Métamorphoses*, VIII,172-177 ; Ovide, *Fastes*, III, v.481 ; Catullus, *Carmina*, LXIV. 251-253.
7. T6, p.79-80, v.123-126 ; t13, p.81, v.92 ; t17, p.194, v.3 ; t17, p.218, v.7-8 , ces trois passages sont munis de renvois au Virgile, *Géorg.* I, 2 : « Ulmis adjungere vites », mais la signification de la phrase chez Virgile est purement agricole.



Lierre chez P. de Ronsard  
- Sibylle de Cumée et message d'amour -

Yoshito EMMI

Études de Langue et Littérature Européennes  
Université d'Okayama  
26 (2007)